海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/09/06　～2018/09/30　)

１．勉学の状況

9 月 20 日に International students 向けの Welcome Day があり、他の留学生や学校の教員、事務員の方々との顔合わせ、学校に関する説明、自分自身や学んでいる学校や分野などに関するプレゼンを行った後､各国から持ち寄ったお菓子やドイツの料理などでアフターパーティーを行いました。「Köln International School of Design」と学校名に「International」が入っている通り、様々な国からの留学生がいて、所属学生の割合の多くを占めているようです。イタリア、メキシコ、イギリス、フィンランド、台湾など様々な国からの留学生がいましたが、やはりヨーロッパ内からの留学生が多いようでした。

24 日からは、留学生と新入生を混合した一週間のプロジェクト「Kölner Ressourcen」が始まりました。プロジェクト全体の概要としては、各担当メンターからグループごとに与えられたケルンに関する課題を通して、ケルンについて知ってもらうという内容でした。私のグループの担当メンターは「Image & Motion」という分野の教授で、与えられた課題は「”ケルンにエイリアンがやってきた”という内容の”モキュメンタリービデオ”を製作する」ことでした。「モキュメンタリー」とは「ドキュメンタリー風に構成したフィクション」という意味です。

エイリアンのデザインは、頭、胴体、下半身をそれぞれ違う人が他の部位を見ずに絵を描くと言う流れで行われました｡描く人それぞれのセンスや絵のタッチが違って奇怪で個性的なエイリ

アンがたくさん誕生しました。そこから更に 3 つのグループに分かれ、エイリアンがケルンにやってきたストーリーを考え、ビデオ制作に入りました。**「私たちの空想であるエイリアンという存在を、一週間と言う短期間（実際のビデオ製作は 3 日程度）で、どのような表現を用いて、現実味を帯びたモキュメンタリーに落とし込むか」**と言うのがこの課題で重要なポイントでした。

私のグループはドイツ人の正規学生 2 人と台湾からの留学生 1 人と私を含めた 5 人でした。ストーリー決めやビデオ制作の話し合いは英語で行いました。千葉大学で留学生と話すなど英語に触れる機会はたくさん設けていましたが、やはり英語での話し合いはすごく大変だと感じました。話すスピードも速く、出身地ごとの発音の癖、これまで学んできた英語では聞きなれない表現や言葉などもあり、恐らく 5 割くらいは理解できなかったのではないかと思います。「話す・聞く」という言語の情報しかないストーリー決めの段階は、正直苦痛に感じました。一方、ビデオ製作の段階に入ると、どのような画面構成や映像で仕上げるかなど話し合うために視覚的な情報も取り扱ったので幾分か気楽に感じました。「All English」と言う環境に慣れるまで大変だなと感じました。同時に、この Köln International School of Design のプロジェクトでは**「出身地やバックグラウンドの違う学生と同じ課題に真摯に向き合う」**ことが重要であると感じました。

慣れない動画編集ソフトを駆使し何とかビデオを完成させ最終日の発表を迎えました。発表では他のメンターのグループの課題を見ることもできました。複数人でスピーカからケルンの街の音（電車が走る音、子供が遊んでいる音、若者がバーの前ではしゃいでいる音、川のせせらぎなど）を流しながら発表ホール内を歩き回ることで、まるでケルンの街の中にいるような空間を演出したグループや、ケルンの街の風景を写真に収め、そこからインスピレーションを得てアートを製作したグループ、ケルンの街のコンビニ「KIOSK」のマップを作ったグループなど、面白い発表を見ることができました。私たちが製作した「エイリアンのモキュメンタリービデオ」に対する他のグループの反応は「くすくす」という感じでした。

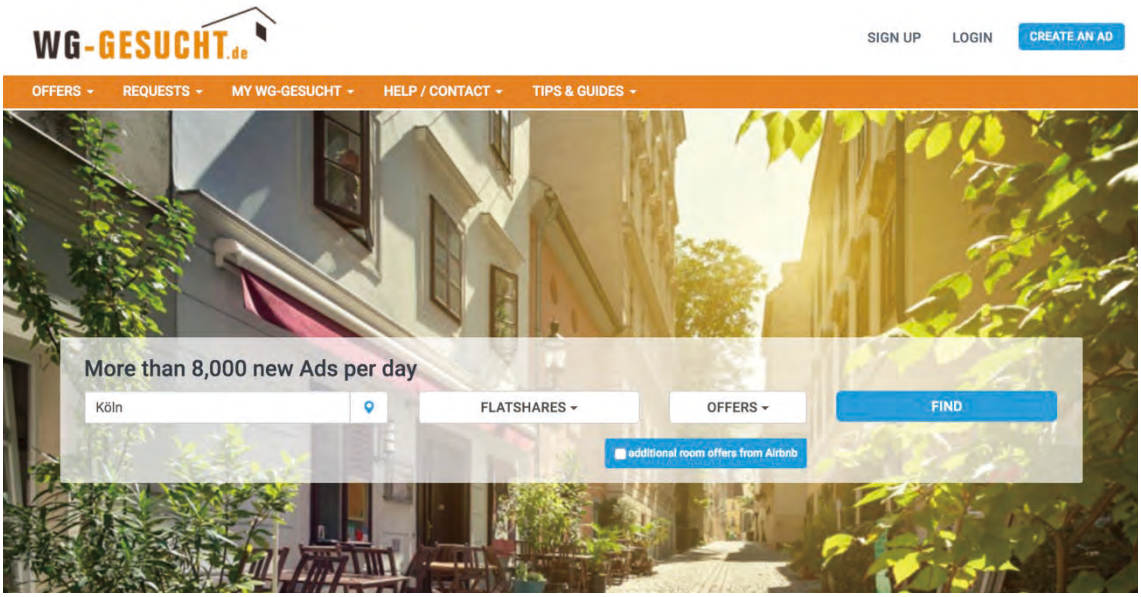
２．生活の状況

９月５日に日本から出発する予定だったのですが、台風の影響によりフライトの延期があり、一日遅れの９月６日に日本を出発し同日にフランクフルトに到着しました。空港からフランクフルト中央駅までの電車の切符を買う際に券売機のメニューが全てドイツ語でわからなかったので近くで切符を買っていたお姉さんに教えてもらっていたところ、横からおじいさんが割り込んで来て券売機に私たちのお金を入れてチケットを買ってくれたのですが、チップとして 10€（約 1,300 円）を持って行かれました。**「チップぼったくりおじさん」の洗礼を受けて、改めて「海外に来たのか」と感じました。**フランクフルトには２日ほど滞在し、美術館に行ったり、大聖堂を登ったりなど少し観光をしてからケルンに移動しました。

私は事前に家を見つけることができないまま留学に来てしまったので、ケルンでは２週間ほど Airbnb の宿やバックパッカー向けのホテルに滞在しました。バックパッカー向けのホテルは、ケルン中央駅の近くにあり、一階はバーとなっていて、スーパーやコインランドリーも近くにあり便利でした。６人部屋のベッドの一つを使っていたのですが、基本的に日中は同室に泊まっている人は観光に出かけていたので、「広い一人部屋に夜になったら誰かが眠りにくる」みたいな感覚でした。私は一週間程度滞在していたのですが、大体の人が３日程度でチェックアウトするので色んな人に会いました。世界一周をしている日本人のスポーツトレーナーの人が泊まりに来たこともあり、とても驚きました。最初に部屋に入って来たときに、彼は私のことを韓国人と勘違いしたようで、同じ日本人なのに「Hello ! My name is Takuya ! Nice to meet you !」と話しかけられました。

チェックアウトする３日くらい前から身体の所々に虫刺されのような湿疹ができて、それからどんどん悪化していき、一週間程度、夜に目が覚めてしまうくらいの痒みが続きました。両親に相談したり、インターネットで調べたりしたところ、**「南京虫（トコジラミ）」という虫に刺されたようで、格安のバックパッカーホテルでは同じような被害に合われる方が多いそうです。**思い返せば、ベッドの手入れは滞在客がチェックアウトした後にスタッフがシーツや枕カバーの交換しかしておらず、衛生的とは言い難い状態だと思いました。ホテル自体は快適に過ごせる環境で、一週間もいたので思い入れもあったのですが、最後にこのような被害にあってしまいかなり残念な気持ちになりました。ホテル選びも気をつけるべきだと思いました。

ホテルに滞在中に家探しをしたのですが、かなり難航しました。家探しは、WG-GESUCHT.deというドイツの賃貸のウェブサイトで行いました。基本的に、サイトに載っている物件を見てドイツ語で大家さんに内見をしたいとのメールを送るという手順で家を探すのですが、返信はほとんど返って来ませんでした。**20 件程度メールを送ったのですが、返信がきたのは 4 件程度でした。更にその内 2 件は恐らく詐欺物件でした。**



ドイツ国内は全体的に家を探すのが難しいらしく、外国人を狙った賃貸詐欺も多いと聞いていたのですが、まさか実際に詐欺物件に遭遇するとは思いませんでした。詐欺物件は大体、「現在、海外にいて内見をすることができません。契約するのなら、お金を送ってもらってからあなたに家の鍵を郵送します。」という内容をメールのやり取りの中で自然に伝えてくるのですが、私がやりとりしていた物件でもまさにこのようなことを伝えられました。もちろんお金は送らずやり取りも辞めました。相手がドイツの ID カードの写真（恐らく偽装？）を送って来て、こちらの信頼を得ようとしてくることもありました。本当に恐ろしいです。

ホテルでの滞在の後は、9 月末まで短期で住める物件を見つけることができたので、そちらに移動しました。家賃は滞在日数で割ると、バックパッカー向けのホテルとほぼ同じ値段でしたが、キッチンもあって自炊もでき、9 月の後半には学校も始まるので、そちらの方が都合良いだろうと思い契約しました。契約しに大家さんを訪ねたときに、私が趣味で行きたいなと思っていたレトロゲームショップがちょうど隣にあったので驚きました。

　レトロゲームショップは、有名なものだとスーパーファミコンやプレイステーションからマニアックな機種までのゲームソフトで棚がびっしりと埋まっていて、古いアーケード筐体や家庭用ゲーム機本体も置いてあり、個人的にとても感動しました。私が訪ねたときに、修理を依頼していた赤いゲームボーイポケットを受け取りに来たお兄さんがいました。店長さんがゲームボーイを丁寧に手入れしてお兄さんに渡していて、**「古いものが長く愛用されている」ことはとても良いことだと思いました。**

短期の物件に滞在している間に、私が賃貸のウェブサイトに載せていた「来年の２月まで住める家を探しています」という広告に、「住めるのは 12 月末までだけどアパートが空くからどうですか？」という連絡が来たので見学に行き、契約させてもらうことができました。ドイツでは WG というシェアハウスが一般的らしく、私は４人用のアパートの一室に住むことになり、ドイツ人の学生２人とフランス人の学生２人（この２人は一室に住んでいます。）と同居しています。来年の１月以降にリフォームをする予定とのことで結構古いアパートですが、部屋がかなり広く、ベッドとソファと机と棚を、以前に住んでいた人から安く譲ってもらえたので、少し家具を揃えれば快適に暮らせそうです。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/10/01　～2018/10/31　)

１．勉学の状況

10 月の初めの 2 週間は Workshop Weeks が行われました。Köln International School of Design (通称：KISD)にある設備の説明を受け、それを利用して何か作品を作ると言う流れで、この学校ではどのようなことができるのかを学びました。午前中に設備に関する簡単な説明を受け、午後の数時間で作品を作るという、思っていたよりもハードな 2 週間でした。

前半の 1 週間は、木工作業ができる Wood Workshop、鉄工作業ができる Metal Workshop、3D プリントやレーザープリント、電子工作の設備が揃った Digital Prototyping Workshop に参加しました。

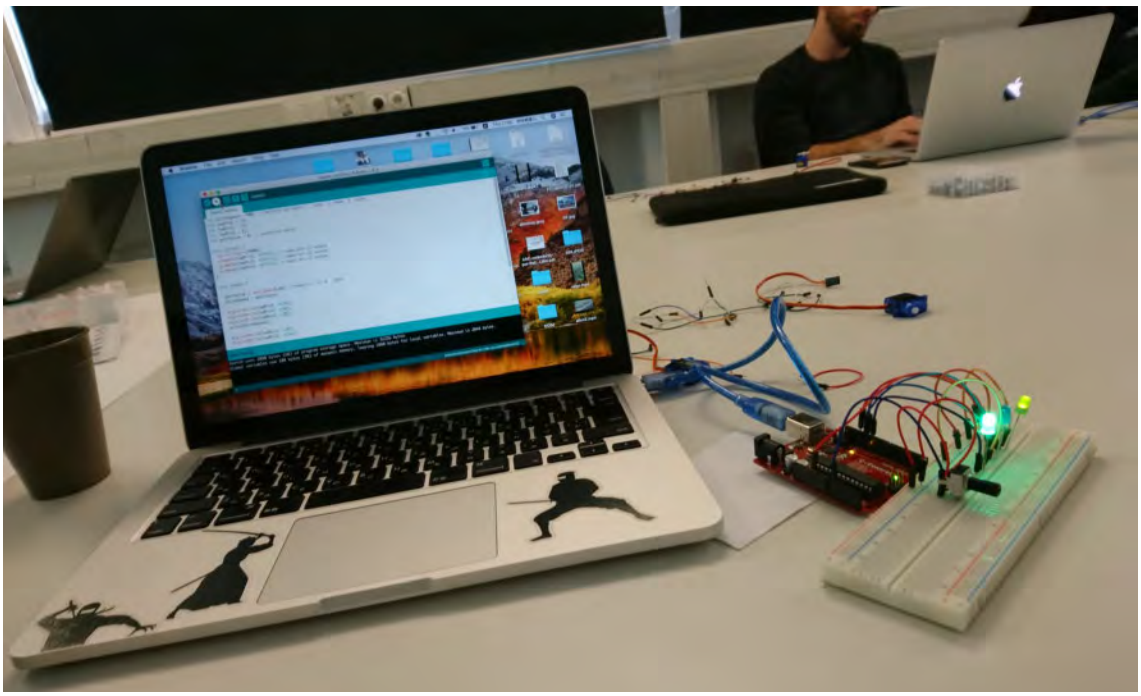
Wood Workshop は、大型の木材を加工する機械から手元で細かく加工する機械、その他にも様々な機械があり、設備がとても充実していました。作品制作では、作業場にあった端材を利用し椅子の制作を行いました。デザインの検討中は、少し攻めたデザインにしたいと思っていたのですが、作業時間（3 時間程度？）や素材の耐久性の問題などから、実際に作るときはかなり妥協しました。結果的にのっぺりとした感じの椅子になりました。また、大きめの椅子が欲しいなと思って作ったところ、完成した後に「これ二人座れるからカップル用の椅子じゃん！」と何人かに言われました。

改めて、**自分の手を動かして何かを作る**と言うのは**とても楽しく達成感がある**ことだなと思いました。

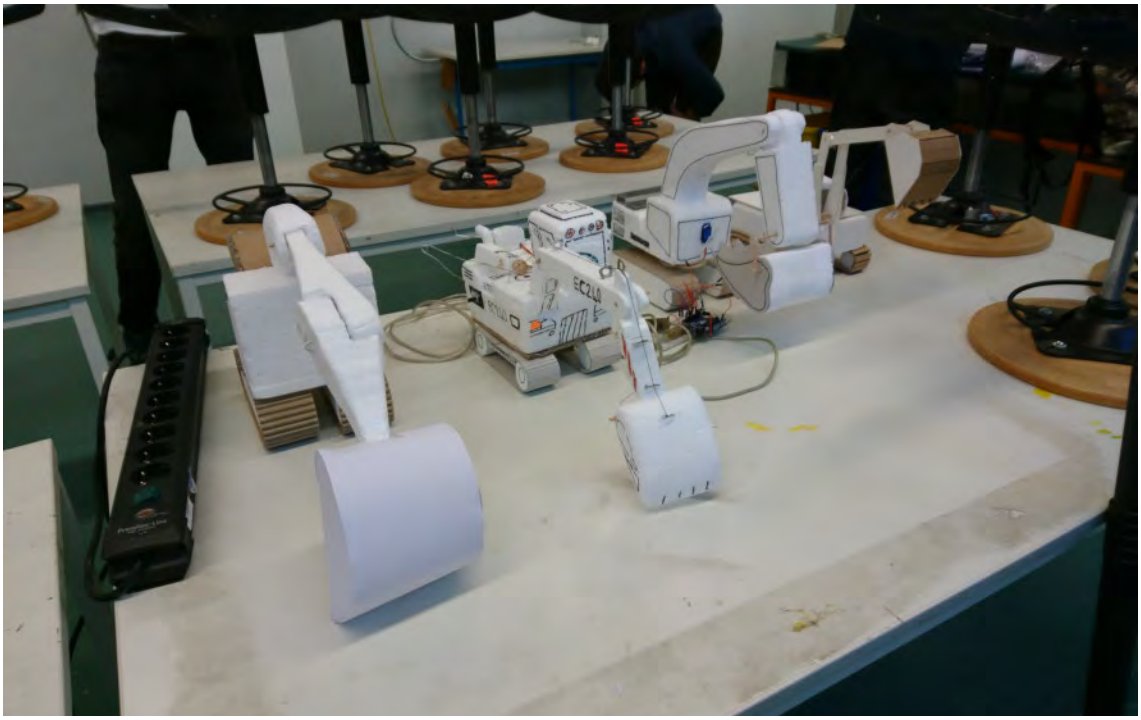
Metal Workshop では、鉄板やネジを利用して壁掛けフックの制作を行いました。鉄板を切断する機械や折り曲げる機械、ドリルで穴を開ける機械などを利用し制作を行いました。今回は利用しなかったのですが、地下室の方には溶接の設備もありました。

Digital Prototyping Workshop は、２日間かけて行われました。Digital と言うものの最初は、手作業での課題が与えられました。お題を与えられスケッチを 10 秒で書きなさいという課題や、事前に用意された発泡スチロールや厚紙、木製の棒などを使って、20 分でプロトタイプ（簡易な模型）を制作しなさいという課題がありました。それらの課題を通して、**スケッチやプロトタイピングの役割は何か？重視するべきこととは何か？**を学びました。それは、**スケッチする対象物の特徴を捉える**ことや、**もっとも重要な機能をプロトタイピングで表現する**など、とても基本的なことでしたが、**デザイナーとして常に忘れてはいけない**ことでした。

その後、Arduino という電子工作ツールの使い方を学びました。プログラミングの書き方や回路の組み方、実例を元に Arduino ではどのようなことができるかということを学びました。



２日目は、1 日目に学んだプロトタイピング、電子工作の基礎を踏まえて、実際に動くショベルカーのプロトタイプを制作するという課題が与えられました。実働時間 3 時間程度で、グループによって力を入れた点、妥協した点が異なりました。私たちのグループは「実際に動く」というところに力を入れたのですが、ショベルカーとしての見た目、デザインの方ではかなり残念なものとなってしまいました。



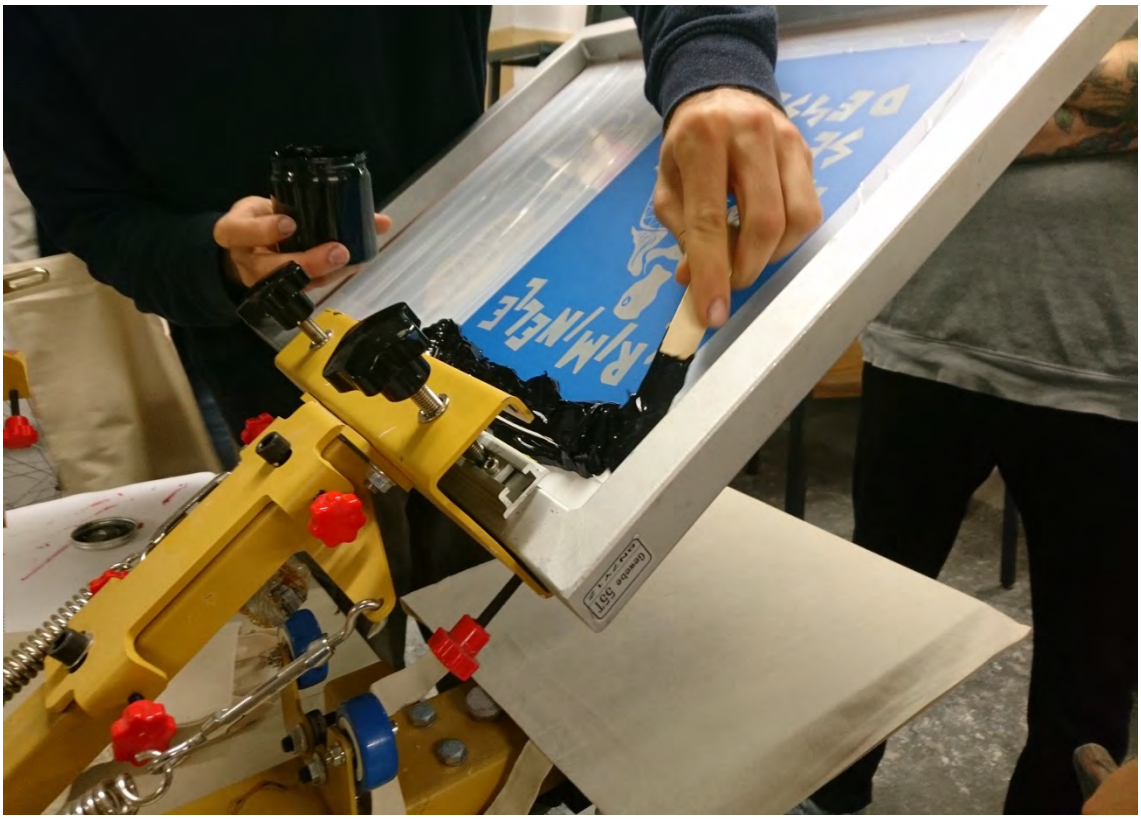
木工や鉄工、プロトタイピングなど、千葉で学んでいたときにも一度学んだことだったのですが、一週間で改めて総復習をしている感覚で楽しめました。設備の利用にも担当の方が手厚く対応してくれるようだったので、今後利用していきたいなと思いました。

後半の 2 週間は、写真撮影の設備が揃った Photo Lab、VR コンテンツの制作環境がある VR Lab、様々なプリンタやステッカー用のカッティングマシン、共用のデスクトップ PC がある Computer Lab、カメラや三脚などの備品を借りることができる Equipment Service、布製品へのプリントができる Screen Printing、ミシンなどの裁縫用の設備がある Textile Lab、最後に調理用の設備が整った Food Lab の説明がありました。

Photo Lab では、作品を撮影する際の光の当て方やカメラの角度などの撮影技術を学びました。カメラ以外にも照明や撮影ブースなどの設備が充実していました。

グループメンバー（私以外ドイツ人）との集合写真を撮影したのですが、ヨーロッパの人って美形だなと思いました。写真の中で私だけ明らかに違和感があります。**骨格から作りが違う**のだと思います。

Screen Printing では、イラストをデザインして、実際にバッグにプリントを行いました。学校の中にこのように特殊な加工ができる設備があることが改めてすごいなとおもいました。



最終日は、午前中に Food Lab で Workshop Week の打ち上げ用の料理を作りました。業務用の食洗器、ガスコンロやオーブンなど、デザインの学校であるにも関わらず、プロフェッショナル用の調理設備が整っていて驚きました。これらの設備を利用し私たちのグループはフルーツバーやブラウニーを作りました。

午後の打ち上げパーティーでは私たちのグループ以外が作った料理も出されていました。サラダやイエローカレーなどが用意されていて、食感は違いますが久々のお米に感動しました。Food Lab は KISD が行う様々なイベントにおいて重要な役割を担っているのだと思います。

この Workshop Week は朝から夕方までタイトなスケジュールの 2 週間でしたが充実していて、この学校でどんなことができるのかを知ることができて、今後の作品制作への意欲が高まりました。

10 月の第 3 週からは、長期のプロジェクトや語学の授業など、一般的な授業が徐々に始まり 11 月から本格的な学校生活になりそうです。

２．生活の状況

年末までの契約ですが、10 月の初めにシェアハウスの一室に入居することができました。Workshop Week の最中に入居だったため、学校が終わって夜 8 時過ぎにスーツケース二つを手に、20 分くらい歩いて引っ越しました。それまで住んでいた短期のアパートから出て少し歩いたところ、隣にあるレトロゲームショップにお兄さんとすれ違い「ドイツ生活楽しんでね！」と言われたので「また遊びに行きます！」と伝えました。新しいアパートにつき、大家さんに 10 月分の家賃 350€と保証金を 400€を支払って、鍵を受け取り入居しました。

前の住人から、机と椅子、小さな棚とベッドとソファを安く譲ってもらったのですが、ベッドの土台が少し壊れていたり、ベッドカバーがなかったりしたので、その夜はソファで寝ることにしました。掛け布団もなく上着を羽織っただけで寝ていたので、翌朝は体がとても冷えていました。「今日は掛け布団を買いに行こう」と決意しました。

大家さんが「家具が必要なら IKEA が安いよ」と行っていたので、電車を乗り継いで 40 分くらいのところにある IKEA に行きました。日本では IKEA に行ったことがなかったので、まさかのドイツで初 IKEA となりました。

掛け布団やベッドカバー以外にも、洗濯物を干すためのハンガーラックや、プライバシーを守るためのカーテン、それらを組み立てるために電動ドライバーが必要だったり、思っていたよりも多くの買い物をしました。およそ 20,000 円くらい使いました。

IKEA の掛け布団は、同じ素材でも夏用と冬用があったのですが、私が気に入った素材が夏用しかなく店員さんに聞いたところ、「冬用はいま在庫がなくて金曜に入荷されるよ」（IKEA に行ったのは火曜日）と言われ、これから冬を迎えるのに夏用の布団を買うのはどうかと迷いましたが、3 日間も掛け布団なしは身体的にも精神的にも厳しいと思ったので、夏用の掛け布団を購入しました。後日、また IKEA に行き、冬用の掛け布団を購入しました。掛け布団が 2 枚ありますが、ドイツの冬は日本より寒いに違いないので、良しとしました。

前の住人からベッド以外に大きな鏡付きのクローゼットも譲り受けたのですが、別の部屋にありほぼ壊れている状態で、動かすと平行四辺形に歪んで運ぶこともままならなかったので、IKEA の電動ドライバーで分解して自分の部屋に運びました。分解したクローゼットは、鏡がついた扉を全身鏡として利用したり、板を壁に立てかけて Metal Workshop で作った壁掛けフックをつけたりして活用しています。

４人用のシェアハウスに、私とドイツ人男子２人、フランス人男子２人（この２人は一緒の部屋）の計５人が一緒に暮らしています。皆同じタイミングで入居して、完全に新規のコミュニティ？なので、掃除当番や週末は一緒に過ごすと言ったルール（家探しでシェアハウス物件を見た際には結構あったイメージです。）は特に無く、生活スタイルもそれぞれ違うので、食事を作りにキッチンにいると誰かが料理していて雑談をすることがたまにあるくらいで、個人的には居心地の良い距離感です。

トイレやバスルーム、洗濯機を使おうと思ったときに誰かが使っている、使ったままの食器が洗われずにシンクに放置されている、食事の時間帯にフランス人の一人が彼女を呼んでキッチンにあるソファで電気を消してイチャイチャしながらNetflixで映画を観ているといったことがよくありますが、これもシェアハウス生活の醍醐味の一つなのだと思います。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/11/01　～2018/11/30　)

１．勉学の状況

10 月末に始まったメインの長期プロジェクト、IoT in Zoo が本格的に動き始めました。このプロジェクトは、動物園をテーマにインターネットと連携したサービスや製品を提案するというプロジェクトで、Köln International School of Design (KISD) の学生だけでなく、KISD の本部である Technische Hochschule Köln (TH Köln、ケルン専門大学)の Computer Science 分野や Economics 分野の学生とチームを組んで活動しています。

10 月末から 11 月初旬は、デザインの学生のみで IoT(Internet of Things)に関するインプットや、実際にケルンの動物園、Kölner Zoo の見学に行ったりする程度でしたが、11 月中旬に他学部の学生との顔合わせと一週間の集中ワークショップがありました。

集中ワークショップの 1 日目は、他学部の学生と一緒に Kölner Zoo への訪問・調査と、動物園のディレクターによる Kölner Zoo が行なっている活動や経済的な面での情報を含めたプレゼンテーションが行われました。一般入場ができない飼育エリアの見学や、飼育員さんや他のスタッフさんのお話を聞く機会もありました。

２日目はデザインのキャンパスでアイデア展開のための方法論のレクチャーを受け、その後１日目の調査を踏まえたアイデア展開を行いました。この日の最後には各チームのアイデアを説明するためのショートプレゼンテーションが行われました。

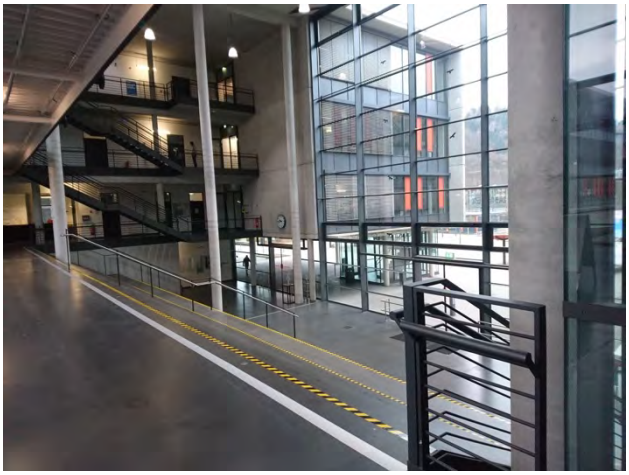
このプロジェクトでは、Computer Science の側面からは「インターネットにつながったシステムであること」、Economics の側面からは「動物園の売り上げを上げること」という要件があるのですが、それゆえにほとんどのグループが、数時間のアイデア展開だったこともありますが「動物園の来訪者のためのモバイルアプリケーション」、「アプリから出題されるクイズに答えてポイントを集め、ディスカウントを得る」という非常に似通ったアイデアにたどり着

いていました。指定された要件の中で、**新しく個性的で面白いアイデアを生み出す**というのは簡単なことではないなと改めて思いました。

全７チームのうち、私たちのチームが最初に発表したのですが、もちろん私たちのアイデアにもモバイルアプリやディスカウントが含まれていました（他のチームになかった部分はポイントを使って動物へ餌を上げる体験を獲得できるというアイデア）。教授たちからは「良いアイデアだね！」といった反応をもらうことができましたが、その後、他のグループが続けざまに似たようなアイデアを発表したのでとても驚きました。同時に、**アイデアは先に言った者勝ち、やった者勝ちなのでは？**とも感じました。

３日目は Economics のキャンパスで、ビジネスに関するレクチャーを受けました。「スタートアップを成功させる秘訣は？」、「良いビジネスモデルは？」と言った内容でした。

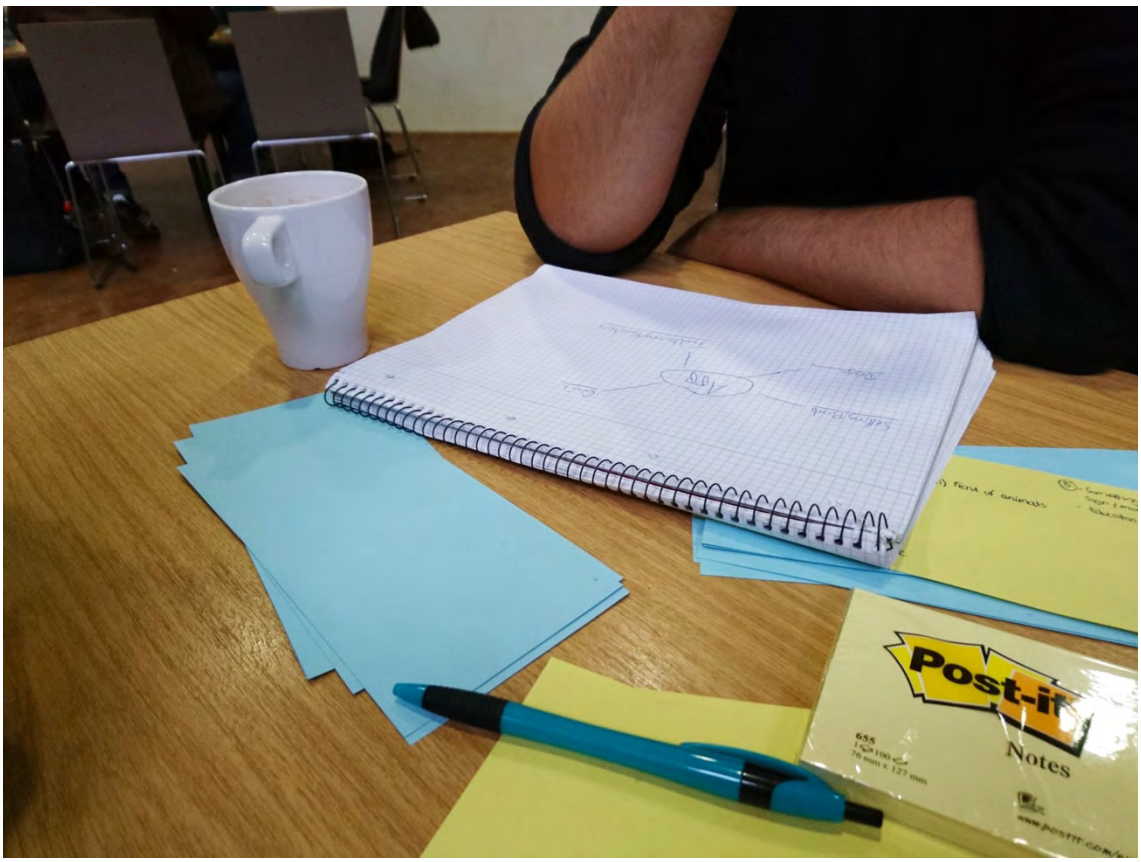
４日目と最終日は Computer Science のキャンパスを訪れました。ケルンから電車で１時間半ほど離れた Gummersbach（グンマースバッハ）という場所にあります。
Gummersbach 行きの電車はかなりの確率で遅延や運行停止が起こるらしく、私も集合の１時間前に到着できるよう早めに出発したのですが、途中の駅で電車が止まってしまいバスに乗り換えて集合の 20 分前くらいの到着になりました。



４日目はプロトタイプ（デモンストレーションを行うための試作品）に関するレクチャーを受けました。以前に KISD のワークショップで学んだデザイン分野におけるプロトタイプとは異なり、プログラミングやシステムと言った Computer Science の分野におけるプロトタイプについて学びました。しかし、どちらの分野においても「**自分のアイデアをよりわかりやすく伝えるためのプロトタイプ**」であることは同じでした。

その後、プロトタイプの作成、アイデアのブラッシュアップを行い、５日目にプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションでは、動物園の来訪者がどのような体験をするか、その体験の中で私たちの提案するアプリやシステムがどう働くかを伝える Storyboard、自分たちのアイデアのゴールを示すための Key Visual、実際にシステムがどう動くかを見せるための Prototype、私たちの提案によって生まれる利益の構造を示す Business Model を用いて、アイデアの説明を行いました。一週間で考えたアイデアなので、どのチームも荒削りな内容でしたが、プロジェクト自体はセメスター終わりまで続くので、さらなるリサーチやアイデアのブラッシュアップを重ね、最終提案につなげる予定です。

私のチームは、私と中国人のデザイン学生２人、ドイツ人の Computer Science の学生２人と Economics の学生１人で活動しています。**学んでいる分野が違うので発想も異なり、デザイン学生だけで行うアイデア展開では出てこないようなアイデアが出てきて面白い**なと感じます。しかし、自分たちのアイデアにおいて何が一番重要であるかという認識が違うなど、**専門分野が違うゆえの誤解や理解不足**が起こることがあり、そこは異なる専門分野の学生と一緒にプロジェクトを行う上で難しい部分だと思います。また、千葉大のデザインの実習では自分たちでアプリやシステムのプロトタイプ、プログラムの作成やビジネスモデルの考案までしなければならないこともあったのですが、同じチームにその専門分野の人がいることはすごく頼もしいです。



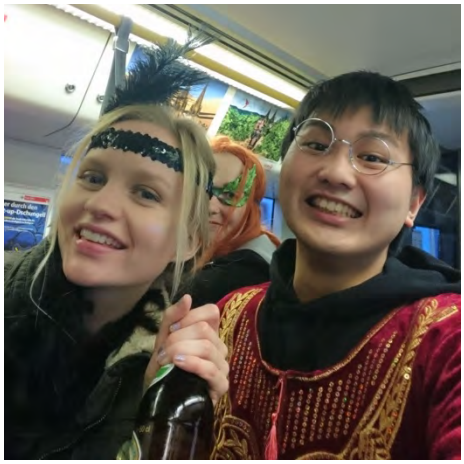
Köln International School of Design では毎週、学内の教授や外部のデザイナーによる講演、KISDtalk というものが行われています。11 月は、サービスデザインの第一人者である Birgit Mager 教授によるサービスデザインの講演や、BMW のデザイナーさんによる未来のモビリティのエクスペリエンスデザインの講演などがありました。自分の英語力が追いつかず内容の全てを理解することは出来ていないと多々思いますが、どの講演も新たな発見やインスピレーションを得られるものがありとても貴重な機会なので、今後も予定が合う限り参加したいと思っています。

２．生活の状況

11 月はドイツのカーニバルの季節が始まりました。私はカーニバルのことを全く知らなかったので、留学生のグループチャットに街中で大勢の人が仮装をして騒いでいる写真が送られてきたとき、「みんなハロウィンはとっくに過ぎたのに何をしているのだろう？」と疑問に思いました。お昼頃でお腹が空いていたのでビーフシチューを作ろうとジャガイモの皮を剥いていたら、ドイツ人のルームメイトがビールを片手にカツラを被ってキッチンにやってきて、「カーニバルやってるけど、行く？」と言われたので、彼の友人たちに混ざって街に出ました。

話によると**毎年 11 月 11 日の 11 時 11 分にカーニバルが始まる**らしく、街ではパレードなどが行われるそうです。**翌年の２月末にカーニバルの季節は終わりを迎え**、その時にまた街ではパレードなどが行われ、どんちゃん騒ぎするそうです。説明してくれた友人に「2 月の途中には次の留学先に行っちゃうんだよね～」と言ったところ、「もう飛行機とか予約しちゃったの？カーニバルあるから 3 月までいなよ～」と言われました。

街中ではみんな仮装してお酒を片手に騒いでいたり、電車の中ではミュージシャンの仮装をした人が大音量で音楽を流してみんなで歌っていたりと、普段の街の光景からは想像もつかないようなとても陽気でクレイジーなムードに包まれていました。



その日は雨が降っていて肌寒いにも関わらず、みんな楽しそうに騒いでいました。ルームメイトたちと周囲の人たちを巻き込んで、エアロビクスっぽい謎の体操をしたりもしました。電車の中で知らないお姉さんに「一緒に写真撮ろうよ！」って言われて、写真を撮ったりもしました。後で写真を見返して、すごく美人だなと思いました。

途中でルームメイトとはぐれ、知らないドイツ人の人たちと話したりしました。彼らはほとんどドイツ語しか話さず、何を言っているかわかりませんでしたが、肩を組んでどんちゃん騒ぎをしました。**人と人を結びつけるカーニバルの力ってものすごい**なと思いました。最後には彼らともはぐれたので、家に帰ってビーフシチューづくりの続きをしました。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/12/01　～2018/12/31　)

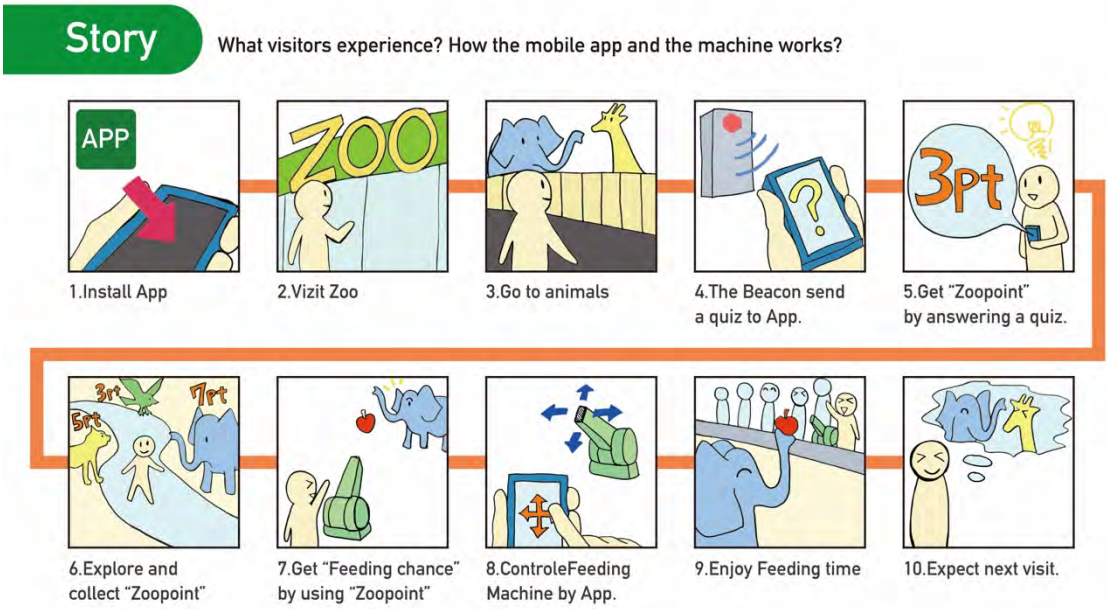
１．勉学の状況

◆長期プロジェクト「IoT in Zoo」

（動物園に関するインターネットと連携した製品・サービス提案）

先月に引き続き、「IoT in Zoo」という長期プロジェクトに参加しています。先月にあった１週間の集中ワークショップで考えたアイデアを軸に、追加リサーチやアイデアのブラッシュアップなどを行なっています。

先月の段階では、アイデアを考えるための動物園に関する一般的なリサーチやインプットをプロジェクト全体では行なっていたのですが、各グループのアイデアに関わるリサーチは不足していたので、動物園の飼育員やディレクターの方とのミーティングを行ったり、動物園に来ているお客さんにインタビューし、自分たちのアイデアを見せて意見をもらうなどの追加リサーチを行いました。千葉大学の学部時代の授業では、一般の人にインタビューなどをすることはありましたが、デザイン提案のターゲットとなっている事業の方に実際にインタビューをさせてもらうという機会はなかったので、実践的な経験ができる良い機会となりました。



チームワーク（Design、Economics、Computer Science の学生 5 人のチーム）については、直接顔をあわせる機会が少なく、**コミュニケーション不足で各々の分野の人が各々のペースで突っ走ってしまっている**ように感じています。12 月後半のクリスマスシーズン、冬休みシーズンも相まって、中だるみしてしまっているようにも感じます。やはりグループワークは難しいなと感じます。私たちのグループは 5 人の中で誰がリーダーであるかなどは特に決めずにやっているのですが、**グループのタスクを管理する立場としてのリーダーを設定した方がより効率的に活動できたのではないか**と少し反省しています。1 月中旬には最終プレゼンテーションが控えているので、気を引き締めて頑張りたいなと思います。良い部分も悪い部分も今後に活かせる経験にできたらなと思います。

２．生活の状況

◆家探し、再び

９月初めにドイツに来てから、初めの２週間は家を探しながら観光をしつつ、バックパッカーホテルや Airbnb で宿を借りて過ごしていました。９月末の 10 日間程度はドイツの不動産 web サイト WG-GESUIGHT で見つけた短期間の賃貸で暮らし、10 月からは年明けにリノベーション予定のシェアハウスに３ヶ月限定で住まわせてもらうことになりました。（詳しくは 2018 年９月分の月間報告書に書いてあります。）12 月になり、その３ヶ月の終わりが近づいてきたので、再び家探しを始めました。

初めてドイツで家探しをした時よりは、慣れもあってか、詐欺の可能性がある怪しい物件の見分けが容易につくようになったり、現地にいて土地勘も付いてきて、手際が良くなった気がします。しかし、12 月末から２月中旬までという中途半端な期間での滞在が目的であるせいか、なかなか自分が求めている条件を完璧に満たす家を見つけることは難しかったです。

そんな中、私が不動産のサイトに載せた家探しの広告に、12 月下旬から１月初旬に、帰省や旅行で家をしばらく離れるので貸してくれるというお話をいくつか頂いたので、その中で**3 週間、家主の猫２匹の世話（餌やりや糞の処理）を任される代わりに、保証金なし、賃貸料 150 ユーロの格安物件**に住まわせていただくことになりました。これまで住んでいた家よりも学校から少し遠く、市街地からも離れますが、冬休み時期で学校に行く頻度も減るだろうということでこの物件に決めました。

猫は昔から好きだったのですが、実際に飼った経験は無く、お世話をすることに少し不安を感じていたのですが、実際のお世話は思っていたよりも簡単でした。猫たちも最初は私に慣れていませんでしたが、だんだんと懐いてきて夜は一緒にベッドで寝たり、お昼寝もしたりしています。朝は餌をちょうだいと起こされます。まさか留学先で憧れの猫と暮らすという夢を叶えることになるとは思いませんでした。大げさな気もしますが、**本当に人生って何が起こるかわからない**なと思いました。

とりあえず年末年始を家なしで過ごすのは不安で今回の猫たちのいる物件に住むことにしたので、１月中旬から２月中旬まで住むことのできる家をまた探さなければなりません。海外で短期間にこんなに引越しを繰り返すことは、これまでもこれからもないと思います。留学中の半年間、ずっと同じ家に住めないというのは不便にも思えますが、**家探しを通していろんな人との出会い**があったり、**いろんな場所を「住む」という行為を通してローカルな視点で見ることができて愛着が湧いたり**して貴重な経験だとポジティブに思っています。

◆これまで住んでいた家との別れ、そして感謝

12 月末は猫のいる家で猫の世話と寝泊りをしつつ、10 月から住んでいた家の片付けをしたりと、二つの家を行ったり来たりしていました。気づいたら他のハウスメイトの部屋がきれいさっぱり片付けられていたりして、彼らと何かを一緒にするということはあまりなかったのですが、少し寂しく感じました。

元旦に特に予定がなかったので、昔の家に残ったままの荷物を取りに行こうと訪れたところ、大家さん（私が住んでいたシェアハウスがあるアパートの管理人）がラジオをかけながらキッチンの片付けをしていました。

大家さんは本当に親切な方で、キッチンの水道の調子が悪い時にすぐに直しに来てくれたり、休日にアパートの廊下や階段のモップがけをしていたりと、**管理人の鑑**だなと思います。今回も、私が使っていたソファや机など次の家に持っていけない大きな家具の処理に困っていたところ、処分の手配をしてくれたりしました。

キッチン周りの片付けを少し手伝っていたところ、大家さんが「**20 年越しの大片付けだよ！**」と言っていました。話によるとこのアパートは 23 年くらい前に買ったらしく、それからコミュニティハウスとしてずっと使われていたそうです。共用キッチン用具や家具の中には 20 年前からずっと使われているものもあったそうです。それを聞くと、**長い歴史が幕を閉じる偉大な瞬間に立ち会っているような感じ**がして、感慨深くなりました。私が住んでいたのは 3 ヶ月と短い間でしたが、大家さん、ハウスメイト、そしてこの家に感謝です。

◆花火だらけのケルンの年越し

大晦日は特に予定がなく、猫たちとゆっくり過ごしていました。ケルンの年越しはどのようなものなのだろうと気になったので、インターネットで調べたところ、ケルン大聖堂の辺りでたくさんの人が花火をしていてすごいという話が載っていました。興味があったのですが、数年前の大晦日に大聖堂の前で大きな事件があったという話もあり、家からも電車で 30 分くらいかかるので、年越しは家で迎えることにしました。

日が暮れてからたまに花火を打ち上げる音が聞こえたのでどこか遠くでやっているのだろうと思っていたのですが、年越しの瞬間が近づくにつれて花火の頻度も増えて、私の家の近くでも花火が上がるようになりました。**年越しの瞬間は街から無数の花火が絶え間なく打ち上がりました。**今住んでいる部屋が 5 階建てのアパートの最上階にあったので、絶好のポイントから花火を楽しむことができました。

街中の様子も気になったので、家を出て近所を散歩したところ、**たくさんの人々が路上で打ち上げ花火**をしていました。街中で花火といっても、線香花火くらいだろうと思っていたのでこの光景には驚きました。また、中心地から離れた住宅街だったので、花火といってもこのあたりは静かだろうと思っていたので、予想よりもとても賑やかなことにも驚きました。

大晦日と元旦は唯一、ケルンの街中で花火をすることが認められている日らしく、たくさんの一般の人たちが路上で打ち上げ花火を楽しんでいました。翌日、街中を歩いているとお酒の瓶や打ち上げ後の花火のゴミなどが路上にたくさん落ちていました。

カーニバルのときにも感じたことですが、**特別な日を地域全体で、全力で楽しむ姿勢**が日本とはまた違った方向性ですごいなと思いました。**ハメを外したドイツはすごいです。**

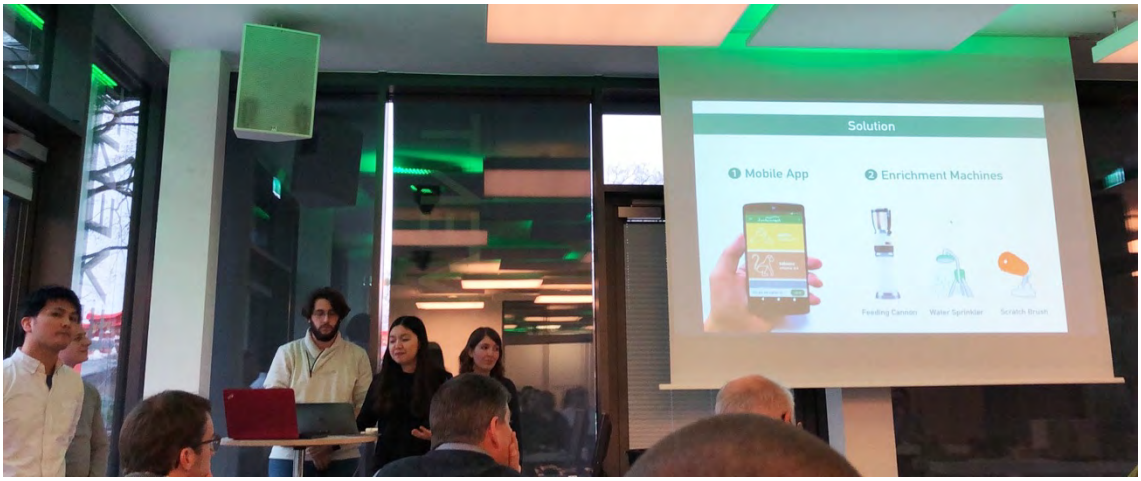
海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2019/01/01　～2019/01/31　)

１．　勉学の状況

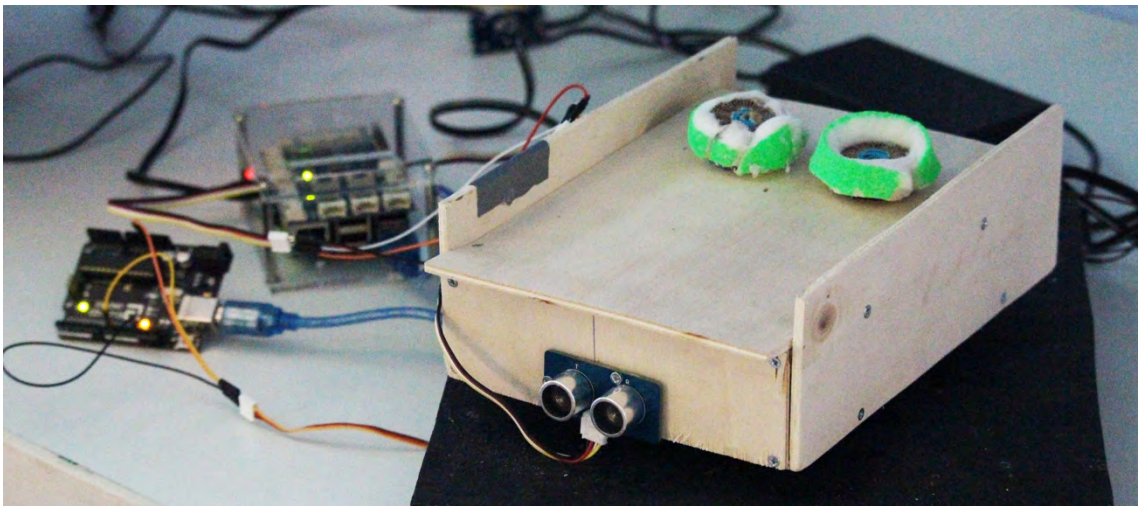
動物園の IoT プロジェクト、終幕。

1 月中旬に、10 月から行なっていたメインの長期プロジェクト「IoT in Zoo」の最終プレゼンテーションがありました。Design、Computer science、Economics の合同プロジェクトなので、実際の製品のデザインの説明ではなく、**自分のたちの製品やサービスでどのような価値を提供できるか**に重点を置き、**どのようなテクノロジーを用いるか、どのようなビジネスモデルを展開しどれくらいの費用がかかるか**を 10 分間のプレゼンの中で簡潔に説明しなければなりませんでした。発表は Kölner Zoo（ケルン動物園）で行われ、学校の教授を含め、動物園のディレクターやドイツの企業の方が数人、審査員として参加してくれました。



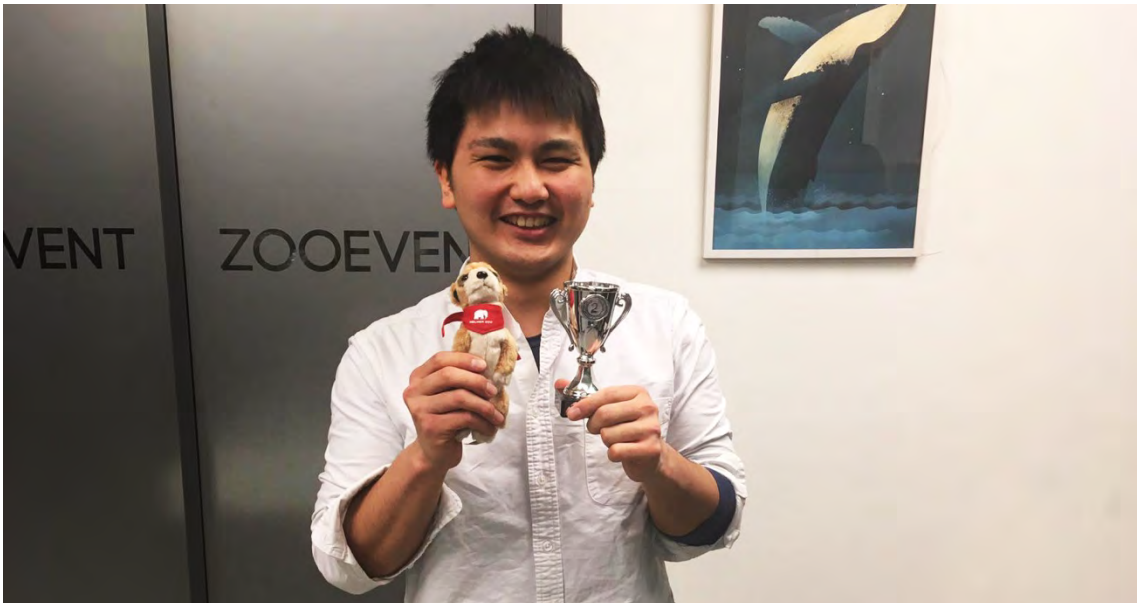
私たちのチームは、**「動物に関するクイズなどのアクティビティを楽しめるモバイルアプリケーション」と「モバイルアプリのアクティビティで手に入れたポイントを使って操作できるエサやり機」**という提案をしたのですが、嬉しいことに最後の表彰で全 7 チームの中 2 位に選んで頂きました。発表直前の週末まで、チームメンバー間での解釈違いやデザインの作り直しがあり、限られた時間の中でベストを尽くしたつもりですが、まだ作り込みが足りないと思う部分も多々あり、表彰されることなど想像もしていなかったのでとても驚きました。

今回の発表では、プレゼンスライドの説明以外にも Computer Science の学生が制作してくれた実際に動くアプリや製品（エサやり機）のプロトタイプを使って発表を行ったので、これらすべてが組み合わさることで**より現実味のあるアイデアの提案をすることができた**と思っています。Desgin の提案だけでは 2 位に選ばれることなんてなかったと思いますし、3 つの分野のどれか一つでも欠けていれば、発表を聞いてくれている人たちにしっかり伝わる提案はできなかったと思います。



この IoT in Zoo プロジェクトでは、**言語や専門分野、考え方の違いでコミュニケーションに苦労**し、かなり**ストレスフル**でしたが、**技術や経済の分野の人と一緒にプロジェクトに取り組む**という、**将来プロフェッショナルなデザイナーとして求められる経験**を学生のうちに体験できる貴重な機会となりました。また、自分たちのアイデアをより上手く伝えるために、学部時代はずっと敬遠していた 3D 制作ソフトや新たなソフトウェアにも積極的に挑戦するようにしたので、私自身の表現技術のスキルも少しは成長することができたと思います。

表彰式で 2 位の賞品として、Kölner Zoo の冊子と小さな動物のぬいぐるみを頂きました。私は年末から最終発表の 1 週間前まで、2 匹の猫がいる家に住んでいたのですが、彼らがとても恋しかった私には、そのぬいぐるみのリアルな顔の造形や体毛の肌触り、つぶらな瞳がとても愛おしく思えました。発表が終わった後、気分が上がって彼を上着のポケットに入れたまま街を散歩していたのですが、気づいたら彼はポケットの中からいなくなっていました。日も暮れて雪が降る中、必死に彼のことを探したのですが見つかりませんでした。今でも彼がどこかで私のことを待っていると思うと悲しくなります。



２．　生活の状況

ドイツ最後の引越し、ケルン最後の家

１月の第２週あたりに、年末年始を過ごした猫の家から新しい家に引っ越しました。ケルンでの最後の１ヶ月はこの家で過ごします。これまでケルンで住んできた部屋の中で一番狭く、ミニマリストの部屋といった感じで、洗濯機がないのでコインランドリー通いをしています。洗濯物を抱えてコインランドリーへ行くと、ケルンに来て最初の１ヶ月ほどホテル暮らしをしながらコインランドリーへ行っていたことを思い出し感慨深くなります。学校までは電車の乗り換えが必要ですがそれほど遠くなく、コインランドリーやディスカウントスーパーが徒歩１分と生活しやすい環境です。

今回もいつものようにドイツの不動産ウェブサイト WG-GESUCHT で探しました。元の住人が１月から２月初旬まで海外の方に行っているので部屋を貸し出すとのことで、大家さん（その住人）が既に海外に行っていて会えないというので詐欺ではないか（「海外にいるので内見はできない、お金を送ってくれたら鍵を郵送する」という詐欺が非常に多いです。）と少し疑っていましたが、その方の友人が鍵を持っていて部屋を内見することができ、その友人の方も信用できそうな人だったので契約することにしました。

ケルンでは結果的に、半年間で４つの家に住むことになりました（ホテルや airbnb を含めると７つ)。最近はセメスター終わりのレポートや書類の提出に忙しくしつつ、次の留学先のイタリアの準備をしているのですが、また家探しをするのかと考えると、正直、気分が落ち込みます。ドイツでの家探しはだいぶ慣れたのですが、国が変わるとなると家の探し方も変わってくるので、また一からかと気分が落ち込みます。

この半年間の**「大・引越し生活」**を振り返ると、**「家」は「ただ住むだけの場所」というだけでなく「心の拠り所」として人の心を支えるもの、安らぎを与えてくれるもの**なのだなと思います。**ドイツに来る時の一番の不安が「家が決まっていなこと」**でした。この理由のためだけに留学に行くのが嫌になるくらいでした。また、留学出発前の日本での数日間は住んでいたアパートも既に引き払っていて、友人の家に泊まらせてもらっていたのですが、地に足がつかない感じがして、**「自分の家がないことはこんなにも不安なのか」**と思いました。**良い意味でも悪い意味でも「家」というものに振り回された半年間**でした。イタリア・ミラノでの留学後半戦を充実したものにするためにも、頑張って新しい「家」を見つけたいと思います。

海外派遣留学プログラム月間報告書

（報告期間：2019/2/1～2019/2/28）

My KISD：ケルンでの冬セメスターの総括

2月の初旬にKöln International School of Design(KISD)でExchange studentを対象に、自身がケルンでの冬セメスターで学んだことの総括を発表するプレゼンテーション(My KISD)がありました。

それぞれの学生がKISDで学んだこと、自身の作品を60cm×60cmのプレゼンシート一枚にまとめて発表しました。60cm四方のシートの使い方が人によって大分異なっていました。私は新聞のように大きなタイトルと写真、文章で構成しましたが、文章は書かず枠線を描いてその上に自身の作品を展示する人、手書きの文章やイラストを載せる人、シートのど真ん中に大きく卵の写真だけを印刷して、周りに作品の小さなブックレットを置く人など、それぞれの個性が出ていて面白い発表でした。

私のMy KISDには、「Communication＝専門分野の違う人と共に働くこと」、「See, hear, know Design＝デザインを見て、聞いて、知ることができる機会が多くあったこと」、「German for Daily Life＝日常のドイツ語・文化を日常生活を通して学んだこと」をKISDで得られた経験としてまとめました。

また、参加した授業での作品や活動をまとめたKISD Portfolio、ケルンでの1セメスターを過ごした感想をまとめたSemester Reportの制作しました。制作は大変でしたが、KISDでの自分の経験を振り返ることができる良い機会となりました。

ケルンでの留学前半戦は、取りたい授業が取れなかったりしたこともあって留学前に想像していたものとは大分違うものになりましたが、どの授業も親切で学生のモチベーションを上げてくれるプロフェッサーが指導してくれたので、実りのある経験となりました。

また、KISDという学校は様々な国籍やバックグラウンドを持ったデザイン分野の学生が集まった小さい学校で、学生も教授も事務員の人たちもオープンな人たちで、初めての長期留学には適切な選択だったのではないかと思います。

留学後半戦突入：ケルンからミラノへ

2月中旬に、前半の留学先があるケルンから後半の留学先、ミラノ工科大学があるミラノへ移動しました。ケルンでの最終日に賃貸のオーナーの人と出会い、鍵を返したり、保証金を返してもらったりなどの退去手続きをしました。その日はオーナーの弟さんも来ていて、留学開始から半年間かけて増えた私の大量の荷物を見かね、親切に「車で駅まで送ってあげようか？」と聞かれたので、お願いすることにしました。数回にわたるケルンでの家探しは大変でしたが、出会ったオーナーの人たちはみんな親切で、人に恵まれたなと改めて実感しました。

ケルンからミラノへの移動は、大量の荷物を持って飛行機に乗るのは、重量オーバーなどもあるし面倒だなと感じたので、約13時間かけてバスで移動することにしました。価格も席の予約、追加の荷物の料金を含めて、日本円でおよそ5000円程度だったので安かったと思います。

深夜12時ごろにバスに乗ったので、乗車中はほとんど仮眠を取って過ごしていたのですが、日が昇って目を覚ますとちょうどスイスを通過している最中で、バスの窓から見える湖や山がとても綺麗でした。途中、休憩でバスが停車して運転手も乗客も外に出る機会があったのですが、空気がとても綺麗でした。

13時間のバスの旅の後、お昼過ぎにミラノに到着しました。バス停のある駅から地下鉄を使って事前に予約していたairbnbの宿がある市街地の方へ移動しました。地下鉄ではスリが多いという話をよく聞いていたのでスーツケース2つをしっかりと握りしめてヒヤヒヤしながら移動しました。

ミラノ工科大学：Welcome Dayと授業の始まり

ミラノに到着した翌日に、ミラノ工科大学でデザイン分野の留学生向けのWelcome Dayがありました。学籍情報の登録や学内Wi-Fiの使い方や履修登録の説明などがあった後にキャンパスツアーがありました。キャンパスツアーでは学生が使える撮影スタジオなどの設備を見学して回ったのですが、先日までいたKISDと違って大きな学校ということもあり、一つ一つの設備が大きくて驚きました。

Welcome Dayの翌週から早速授業が始まりました。ミラノ工科大学では、メインのプロジェクトProduct Development Design Studioとその他に2つのレクチャー形式の授業Design&ManufacturingとSystem Design for Sustainabilityを受講することになりました。

Product Development Design Studioではデザインとエンジニアの学生が合同で、飛行機のインテリアをテーマにデザインを行うプロジェクトが始まりました。私のチームは私とイタリアのデザイン学生、エンジニアのスペイン人と中国人の学生の4人でプロジェクトを進めることになりました。

Design&Manufacturingは、製品の材料や加工方法について学ぶのだと思っていたのですが、それに加えて製品の構造や耐久性についての物理的な計算なども学ぶようで、初回の授業から唐突に物理の授業のようなものが始まりかなり困惑しました。高校卒業して以来全く触れていない物理の記憶を頑張って引き出しつつ、英語で計算の説明を受けるのはかなりハードです。

City Walking Tourとイタリアの洗礼

　Welcome Dayのあった週に、ミラノの街を散策するCity Walking Tourというものがありました。留学生を対象にミラノ工科大学の正規学生数人が、街にあるお城やモニュメントなどを訪れながらその歴史的背景などを説明してくれたりしました。デザイン分野以外の学生も多く参加していて、彼らと話をしながら街を回りました。

　ツアーの最後には1人10ユーロ程度でドリンク1杯とビュッフェ形式の食べ放題ができるAperitivo(アペリティーヴォ)というイタリアの飲食スタイルを体験しました。コスパが良いのですが、その分かなり人気なようで、訪れたお店に入るのに30分以上、空いてる席を見つけるのに20分程度はかかりました。

実はツアーの最中にあるトラブルに巻き込まれました。Duomo広場という場所を訪れていた時一緒に話していた学生とはぐれてしまったのですが、その時に大柄な黒人男性が「Where are you from? Japan! Honda! Nagatomo!」といった感じで私に近寄って来ました。何だ何だ？と混乱していたらその男性が「魔法のおまじないをかけてあげるよ！」みたいなことを言って私の手首に一瞬にしてミサンガを巻きつけて来ました。

そこからが悪夢の始まりでした。ミサンガを巻きつけ終わった瞬間に彼の表情が冷酷なものへと変わり、「Pay！Pay！」と言い始めました。さらに彼の後ろから他に3人程度男の人が出て来てお金を要求して来ました。1人につき20ユーロなどと言いながら。

ツアーの前日に日本人が経営するヘアサロンでスタイリストの人に色々なトラブルの話を聞かされていて、その時に聞いた「この前、日本人相手に暴行事件があった」という話が頭をよぎりました。

約2年くらいちゃんとした運動をせず体を鍛えていない自分が、目の前の男4人を相手に逃げ切れる気も彼らを打ち負かせる気もせず、武器なんか持ってる可能性もあるのでは？という予想もいいまじり、その場はお金を乗り切ることにしました。60ユーロほど。

　あとでインターネットで観光地でのトラブルについて調べたところ、彼らは「ミサンガ巻き」と呼ばれているらしく、観光客を相手にミサンガを巻きつけて高額なお金を請求してくる人たちのようです。ミラノではなくローマなどでの体験談なども見つけたのですが、全く同じ手口で「Honda! Nagatomo!」と言いながら近寄って来たという話が載っていて少し笑ってしまいました。

　完全に自分の不注意とトラブルに対する知識不足が原因ですが、理解できない言葉で何も分からぬまま終わってしまったのではなく、聞き取れる英語でトラブルに巻き込まれてしまったので「自分は悪に屈してしまったのだな」という苛立ちのようなやるせない感情が後からふつふつと湧き上がって来ました。

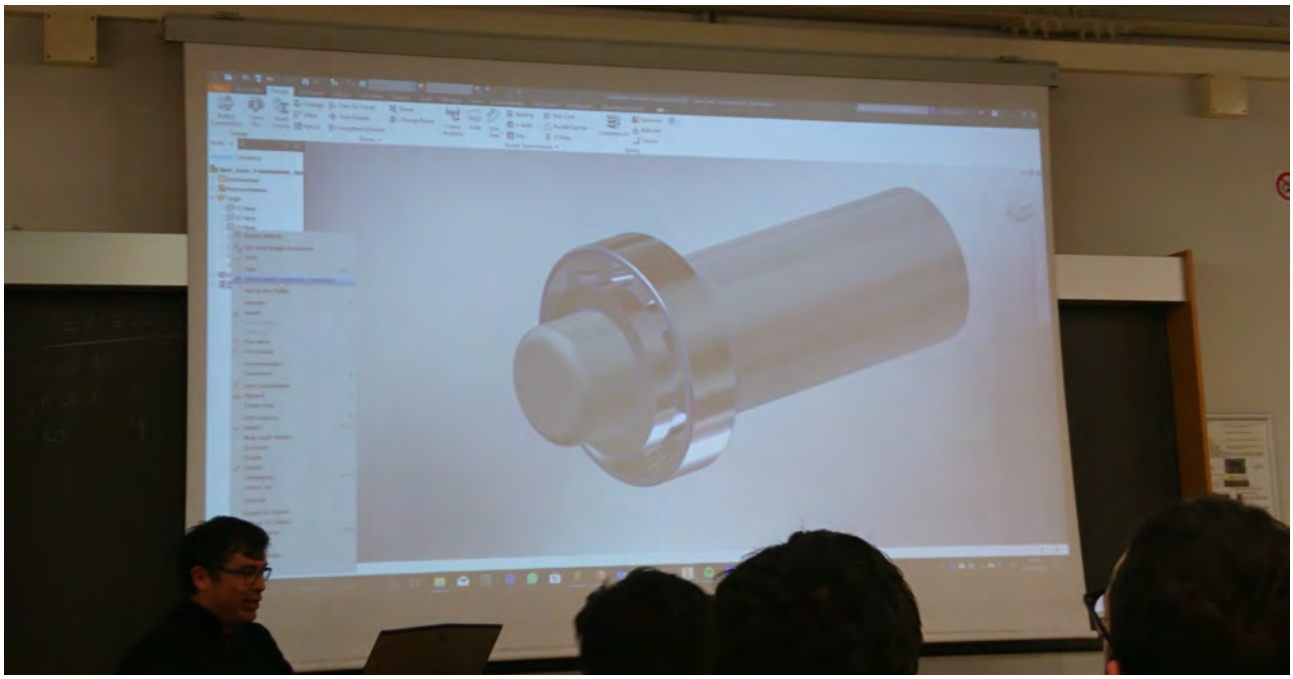
　改めて「海外って怖いなあ」と思いました。この経験を教訓に気をつけていきたいと思います。これから留学や海外旅行に行く人にもぜひ気をつけてもらいたいです。ちなみに、60ユーロで買ったミサンガは、お金を払った直後に見てるだけで嫌な気分になったので引きちぎって捨てました。

海外派遣留学プログラム月間報告書

（報告期間：2019/3/1～2019/3/31）

リサーチにかける1ヶ月：Product Development Design Studio

先月末からミラノ工科大学でのメインのプロジェクト、Product Development Design Studio が始まりました。テーマは「Flight Experience」、デザインの対象は飛行機内の荷物入れや座席などのインテリアです。私のチームは私とイタリア人のデザイナー、中国人のエンジニアの学生で構成されています。(スペイン人のエンジニアの学生もいたのですが、今セメスターで履修している授業が多すぎて手に負えないと言うことで参加をキャンセルしました。) 毎週月曜日の朝9時から始まり、午前中がグループワークのフィードバック、午後が3Dソフトウェアやプログラミングなど、最終提案を表現するためのスキルを学ぶレクチャーがあり、夕方6時に終わるハードな授業です。



3月は1ヶ月間、コンセプト提案のための事前リサーチに時間をかけました。過去、現在、未来の飛行機のインテリアのトレンド、利用者の特徴を探るためのデスクリサーチ。実際に利用者の意見を聞くためのオンラインアンケートと空港でのインタビューを行いました。

デスクリサーチを通して、日本語より英語で見つかる情報量が圧倒的に多いということを実感しました。

飛行機内のインテリアについてのリサーチをしている時に、私が日本語で調べていて見つけられたのは「カッコいい飛行機内の写真まとめ！」のようなまとめサイトばかりでしたが、イタリア人のチームメイトは英語で航空会社の公式インテリアカタログを見つけてきたりしました。wikipediaなども英語版はあるけど日本語版のページは存在しないという記事も少なくありませんでした。

しかし、日本語などの特定の言語で見つけた情報にはより実体験に基づいたものやローカルなものなど濃い情報あったり、まとめサイトのようなものでも公式サイトへのリンクにつながっていたりするので、どちらが良いとは一概には言えず、効率よく多くの情報を集めるには日本語も英語もうまく組み合わせてリサーチするのがベストだなと感じます。

デスクリサーチの後は、実際にミラノのリナーテ空港に行って飛行機のユーザーへのインタビューを行いました。

空港のベンチでフライトを待っている人たちの様子を見て「この人は快くインタビューに答えてくれそう」「この人は気難しそうだな」など色々な思案をしながら、突撃インタビューを行いました。

インタビューに答えてくれた人たちは、イタリア人はもちろんのこと韓国人やドイツ人、仕事の移動でのフライトや旅行の帰りなど、様々な背景や理由で飛行機を利用していました。

インタビュー中に心がけたのは「どうやって相手の警戒心を解く、心を開くか」でした。

例えば、インタビューの最中に面と向き合って話をすると相手に圧力・プレッシャーをかけてしまうような感じがするので横に立ったり、椅子があれば隣に座らせてもらったりしました。また、ドイツ語や韓国語の言葉を少し知っていたので「少し言葉を知っているよ！」と、相手の国についての話題を振ったりすることでコミュニケーションの入りがスムーズになりました。

　難しかったことは、「自分の知りたい・聴きたい内容へどうやってインタビューを誘導するか」でした。

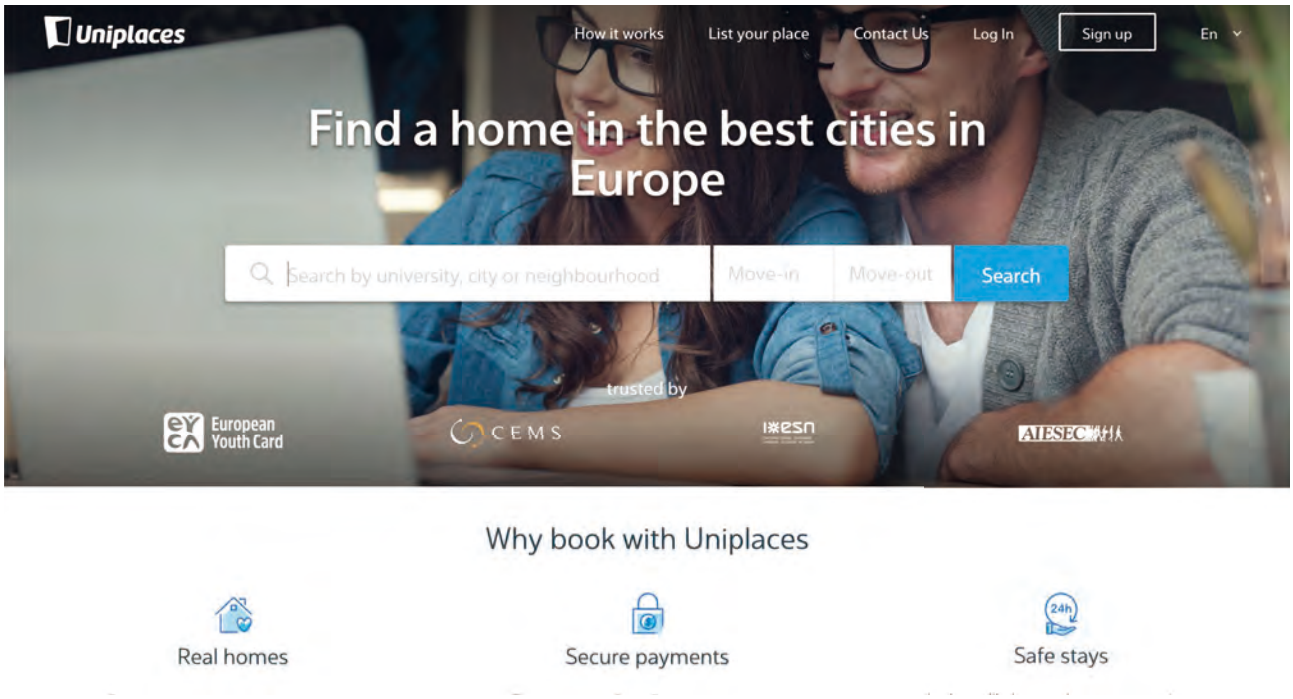
　相手の心を開くためにナチュラルなコミュニケーションを心がけていたり、つい話が盛り上がっていたりすると、インタビューが終わった後に「あのことについて聞くのを忘れていた・ああいうことをもっと聞けばよかった」ということがよくありました。もちろん、聴きたいことについては事前にリストを作って用意していましたが、コミュニケーションをうまく取りつつ知りたい内容を聴きだすというのはなかなか難しかったです。警察官のようなインタビューのプロフェッショナルは本当にすごいなと尊敬します。ただ、話が脱線することで聞くことができる面白い話や予期しない気づきもあるのでそれはそれで良いと思います。

イタリアでの家探し

ケルンで様々な苦労をした「家探し」がミラノでも始まりました。

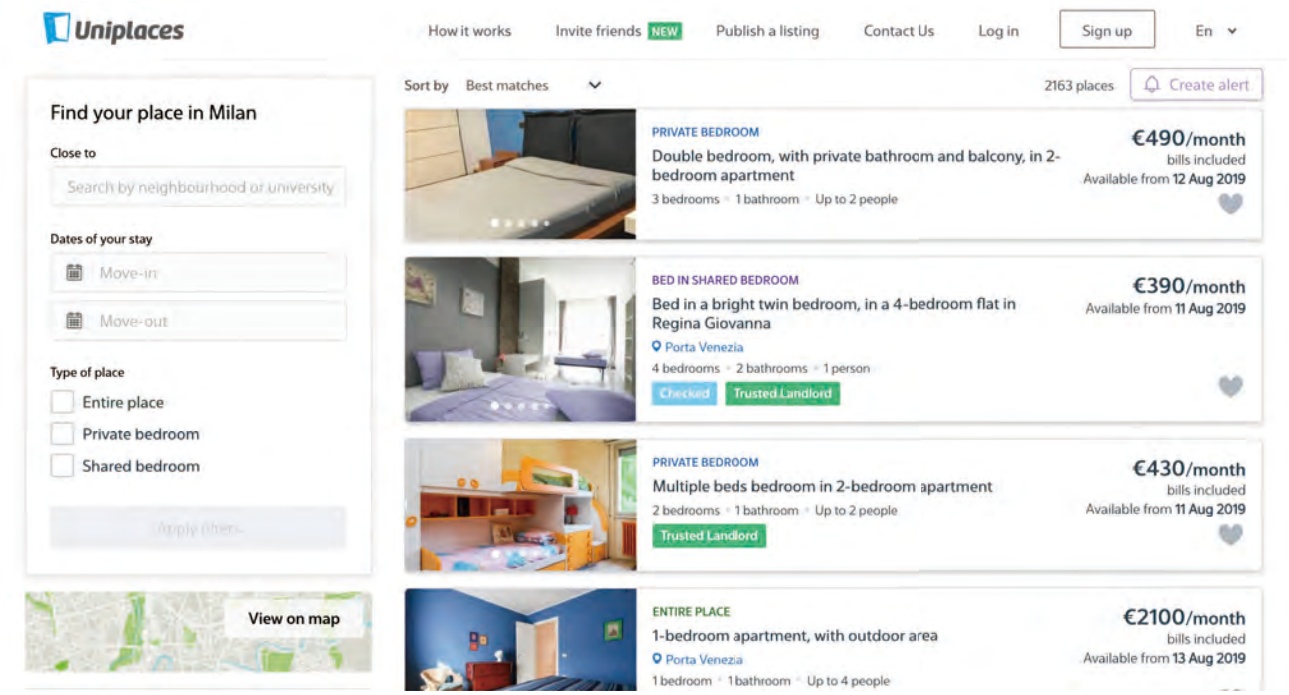
ミラノでの家探しのウェブサイトはSpotahomeというサイトが主流なようで、掲載されている物件に賃貸の期間を申請して家主からの承認が得られれば、サイト経由で1ヶ月目の家賃が自動的に支払われ、入居日当日は保証金を持っていき鍵を受け取るという仕組みです。物件はどれもサイトの審査を通っていて詐欺の心配はありませんでした。

なかなか良い物件が見つからなかったので、友人に相談したところ学生向けの不動産サイトUniplaceというサイトがあるらしく、そちらもSpotahomeと同じシステムのウェブサイトでした。



ドイツからイタリアの移動の前にも少し家探しをしていたのですが、ミラノに移動してから最初の3週間は事前にAirbnbの宿を予約していたので安心してしまい、宿の退出直前になってから家探しを再開したのですが、Uniplaceを利用して1日程度で家の契約をすることができました。

ドイツでは350ユーロ程度でシェアハウスの1人部屋を見つけることができましたが、イタリアだと物件を見つけることはドイツより簡単ですが、350ユーロ程度で共用ベッドルームのシェアハウス、500ユーロ以上で1人部屋を借りることができるような感じでした。



最初は、1人部屋を探していましたがなかなか良い条件で見つけることができず、色々と妥協して学校から電車で一時間程度の最大4人の共用ベッドルームのシェアハウスに7月末まで入居することにしました。

ドイツでの家探しはサイトで物件を見て自分でメールを書いて内見に行くということを繰り返して契約に辿り着くとった感じだったので、全てがウェブサイト上で完結するUniplaceやSpotahomeでの家探しはかなり便利であると同時に、実際に物件を見ずに決めてしまうというのにはかなり戸惑いがありました。ドイツでは1〜3ヶ月の短期間の物件を転々としていてそれに慣れてしまっていたので、半年間の住居を一度で決めてしまうということにも謎の不安がありました。でも自分の感覚がおかしくなっているだけなので、住居が一度で決まることは本当に楽だと思います。

シェアハウスに入居しました。

　入居当日は夜からの入居となったので、最寄駅から暗い夜道の中、重いスーツケースを引きずりながら新居へ向かいました。

　シェアハウスには私と同じタイミングで入居したブラジル人とフランス人の学生がいました。彼らも私と同じように交換留学でミラノへ来ている学生です。

　4人部屋のベッドルームは、ウェブサイトでは2つのベッドが並んでいる写真と2段ベッドの写真が別々に乗っていたのですが、実際に見てみると写真より狭い印象でした。正直な感想を言うと、写真詐欺と言った感じです。

　その日はみんな夜に到着したらしく晩御飯もなかったので、3人で深夜まで空いているスーパーへ行きパスタを買って、家で茹でてトマトソースをかけて食べました。このことからシェアハウスのグループチャット名がPasta Boysになりました。ベッド同じ部屋ですが、思っていたよりぐっすり眠ることができました。

　これからこの3人（+4月から1ヶ月だけ住む予定の人がいるとオーナーが言っていました。）でとてもインターナショナルなシェアハウス生活を送ることになりそうです。

リモート卒業式

私は留学中ですが、3月で千葉大学の学部生を卒業し、千葉大学大学院の修士課程に進学するので、学部の卒業式がありました。実際に日本で卒業式に参加することはできないので、学科の先生が学科の式典には参加できるようにとビデオチャットでの参加を企画してくれました。イタリアと日本は時差が8時間（サマータイムは7時間）あり、式典が日本時間13時頃から、ヨーロッパ時間の朝6時ごろからだったので眠らずに待機していました。

式典の会場では留学に行っている学生の映像が大きな会場の隅に設置されたスクリーンに投影されているようで、卒業証書授与の時に私の名前を呼ぶ声が画面の奥の方から聞こえました。友人たちとの写真もスクリーン越しに撮影しました。

寝ていなかったので最初は元気が出ませんでしたが、久々に学科の先生や友人たちと話をすることもできたので参加して良かったと思いました。

式典なのでスーツですが、ビデオチャットなので下の方は履いていなくても大丈夫だろうと寝巻き用のズボンを履いていたのですが、勘の良い先生に「お前、下はいてないだろ？」と聞かれ見事にバレました。

海外派遣留学プログラム月間報告書

（報告期間：2019/4/1～2019/4/30）

4人目のルームメイト

　4月に入って、シェアハウスにルームメイトが1人増えました。彼はコロンビア出身でメキシコの大学で勉強しておりミラノにはインターンシップで来ているそうで、1ヶ月だけこのシェアハウスで暮らす予定です。

　ブラジル人、フランス人、日本人にコロンビア人が加わって、更に生活がインターナショナルになりましたが、キッチンはとても狭くなりました。でも楽しいです。

ミラノデザインウィーク

4月のミラノでは世界最大級のデザインの見本市、ミラノデザインウィークがありました。世界各国から様々な会社が自身の製品を出展しており、一度に様々な製品・デザインを見ることができるデザイナーにとっては素晴らしい機会です。

今回、千葉大学の卒業生であるデザイナーの方がデザインウィークで展示を行うとのことで、その設営・展示補助をさせていただく機会をいただきました。

展示物は膨大な数の木材、ワイヤー、3Dプリントで作られたパーツ、特殊なグリップで構成された什器で、大きなものでもトラックなどで運ぶことができる会社と違い、日本から飛行機で持ってくることは不可能だったので、什器を一から組み上げるところから作業が始まりました。

ワイヤーを3Dプリントのパーツ、木材に通して最後にグリップで留めることをひたすら繰り返す作業は、正直にいうと気が遠くなるようでした。しかし、什器が完成した時の感動は素晴らしかったです。

展示会場は屋内に各展示の小さなブースがいくつも設けられているのですが、完成した什器を配置する際にデザイナーさんが他のブースの展示物の大きさ・高さなどを見て、入り口や通路から来場客の目に留まるか、他の展示ブースを見てから自分たちのブースに誘導できる導線は整っているかなどを検討していました。展示を行う際にどのようなことを検討すべきかの参考になりました。

開催期間中はデザイナーさん、展示への協賛・製品の提供をしてくれている企業の方の補助として、展示ブース内でお客さんへの英語での説明などを行いました。見に来てくれる人は一般の人はもちろんですが、中にはデザイナーの人や照明の会社の人などもいて、将来的なビジネス・商談に繋がりそうな話をすることもありました。

デザインという業界に限らず、見本市や展示会のような交流の場で生まれるアナログな出会い・繋がりが仕事を広げるためには重要なことであると実感しました。

海外での展示の仕事は学生の時にはなかなか経験することのできない貴重な機会となりました。しかし、展示の仕事とその合間に入る学校のプロジェクトのミーティングや作業で、ミラノデザインウィーク中の他の企業の展示を見に行くことはあまりできなかったので、残念でした。

今回の展示補助の仕事はボランティアという形でお手伝いをおさせてもらったのでお金は頂いてませんが、お礼として作業や展示の後に毎晩美味しいご飯をご馳走していただきました。ご馳走していただいたディナーの中で、10kgのフィレステーキが美味しくて忘れられません。

ミラノ工科大学内での展示

　ミラノデザインウィークの期間に合わせてミラノ工科大学の学内でも、デザイン学生が過去に製作した作品の展示が行われていました。

　基礎授業の3Dモデリングやプロトタイプ制作の課題の展示、オリジナルの製品を考える実習のプロジェクトの展示がなどあり、どれもクオリティの高い作品ばかりでした。

　正直、製品デザインに関しては千葉大学よりもレベルが高く、もちろん自分自身の実力よりもレベルが高く、少し悔しい気持ちになりました。同時にどちらの大学で学ぶことにも、それぞれの強み・特色があると感じました。精進したいと思います。

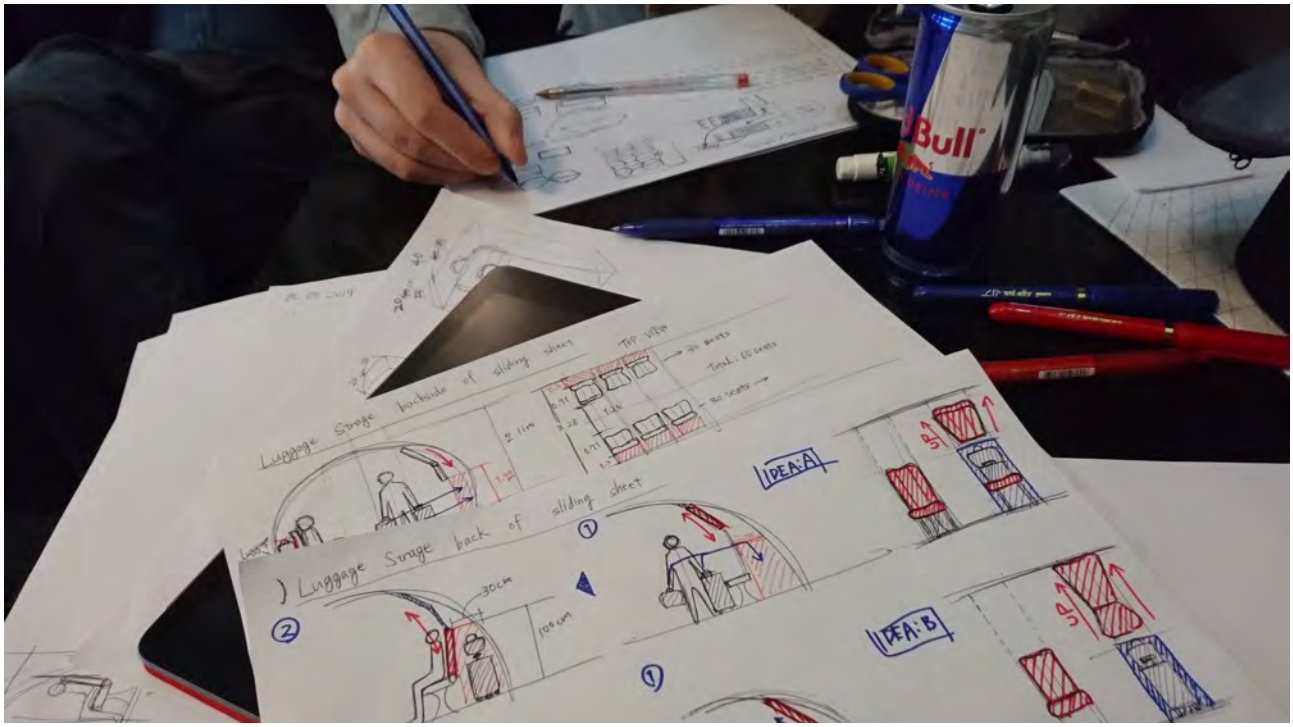
　製品デザイン以外にも、グラフィックデザインやファションデザインの展示もあり、どれも魅力的なものばかりでした。

アイデア出しは苦しい：Product Development Design Studio

3月は1ヶ月間じっくりとリサーチを行い、月末にリサーチのまとめ、解決すべき問題の定義、ペルソナ（デザインをする際に設定する架空のターゲットのこと。自分たちのデザインを必要とする人間はどのような人物像かという設定。）のプレゼンテーションがありました。私たちのチームは「飛行機内での荷物問題」についてのデザインを行うことになりました。

「機内持ち込みの荷物のみで搭乗、週に2度の国内出張で飛行機を利用するビジネスパーソン」をターゲットに「持ち込み荷物に関する仕組みの改善」「荷物に関する情報の提供」をゴールに設定し、デザインのコンセプトの検討を始めました。

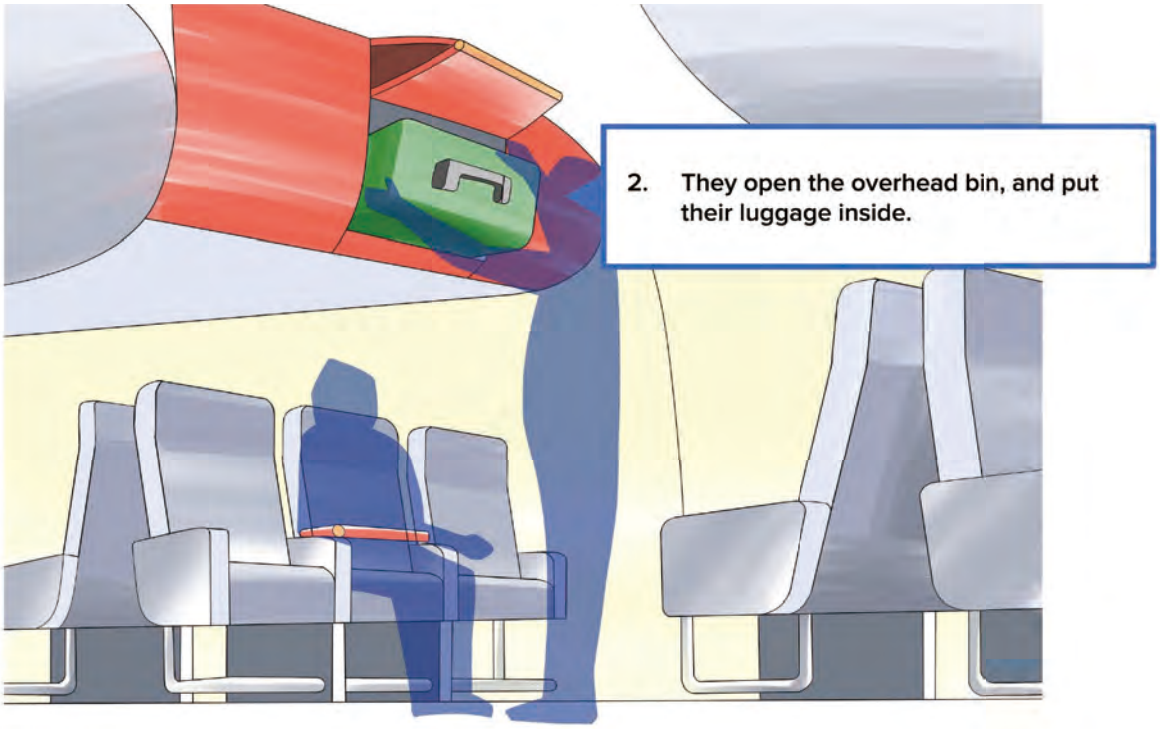
コンセプト検討の段階ではかなり迷走しました。このプロジェクトでは「飛行機内の製品・プロダクト」の提案が最終ゴールなのですが、「荷物に関する情報の提供」という所にフォーカスし過ぎてしまって、コンセプト案が製品の提案ではなくシステムのみの提案になってしまっていたり、グループメンバー内での解決すべき問題点に対する認識が異なっていたことが多々ありました。



小さな紙にイラストや文章を書き出してコンセプト検討を進めたのですが、自分が良いと思ったアイデアでも、しっかり確認すると色々な制約がある中では問題点が多くあり実現することが難しかったり、一点ではユーザーにとって便利でも他の視点から見ると不便なところがあったりと、かなり難航しました。デザインに限らず、一から新しくて素晴らしいモノを生み出すのは本当に苦しいなことだなと思いました。

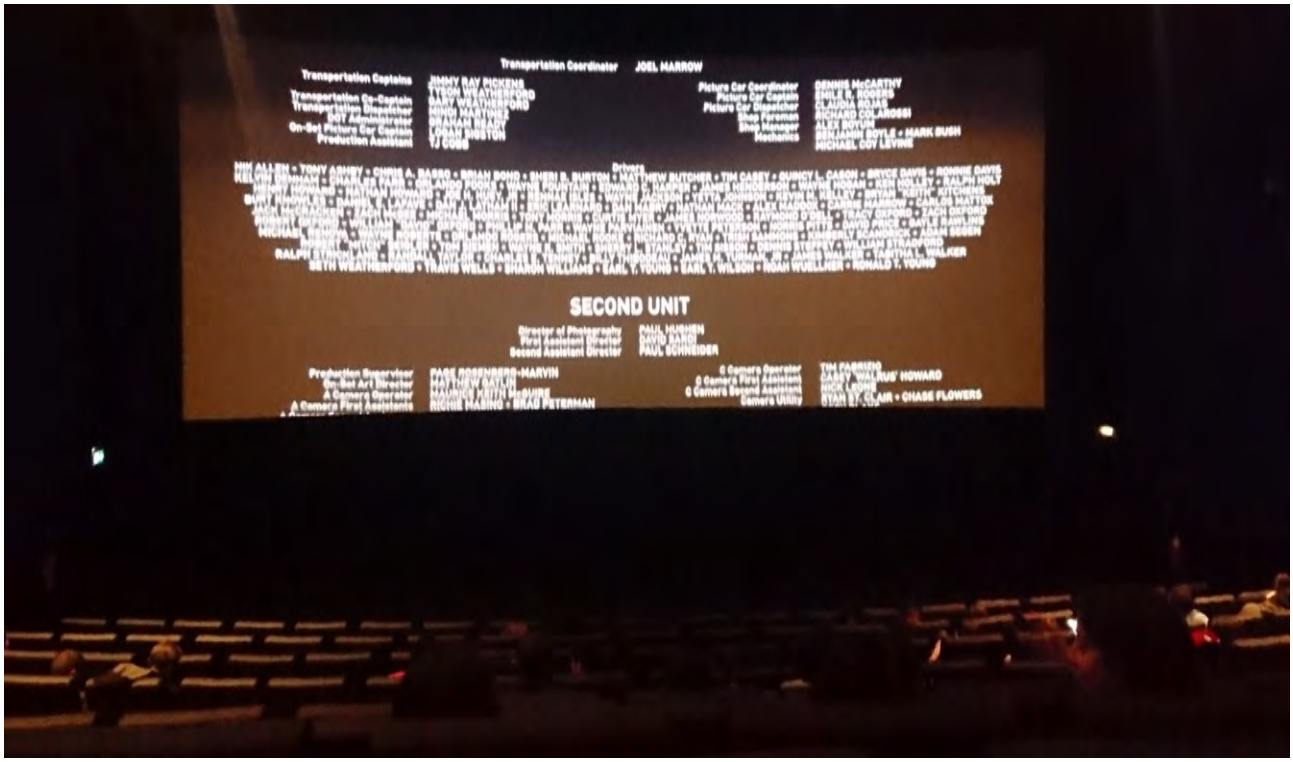
毎週グループメンバーで話し合って考えを共有したり、担当教授に問題点を指摘してもらったりしてコンセプトの構築を進め、4月末にはコンセプト案のプレゼンテーションがありました。

3つのコンセプト案の中で教授たちと話し合って、私たちのグループは「新しい形状の荷物入れと座席の配置」というコンセプトでプロジェクトを進めることになりました。3月は「リサーチの1ヶ月」でしたが、4月は「コンセプトの1ヶ月」でした。5月は実際のデザインを検討する月になります。



イタリアで映画を見た話

　月末にルームメイトに誘われて、「アベンジャーズ/エンドゲーム」という映画を見に行くことになりました。自宅からバスで30分ほどのショッピングモールにある映画館へ行きました。もちろん日本語吹き替え版はないので「イタリア語字幕付・英語版」で映画を鑑賞しました。



　私はアベンジャーズシリーズは最初の数作品しか見ておらず、洋画を英語版で見たこともあまりなかったので最初は楽しめるか不安でしたが、最後のクライマックスのシーンでウルっとしてしまう程には楽しむことができました。

　役者さんの英語のセリフを完璧に理解することは難しかったですが、話の流れを大体掴みながらストーリーを楽しむことはできました。また、日本語吹き替えというフィルターのかかっていない、役者さんのオリジナルの演技がとても素晴らしかったので、吹き替え版にも良い所はありますが、吹き替え版で見ることは「役者さんや作り手が本当に伝えたいことにフィルターがかかってしまう」少し勿体無いことなのではないかと思いました。

　また、映画での感動的な展開があった時に、会場にいる観客みんなで拍手をしていたのですが、それも今まで経験したことのない新鮮なものでした。会場全員で一つの映画を楽しんでいるという感じがしました。

　「映画を観る」という日本でも普通に体験できることでも、違う国だと国民性や文化の違いを感じることができ新鮮で、留学中の貴重な体験となりました。

海外派遣留学プログラム月間報告書

（報告期間：2019/5/1～2019/5/31）

さよば友よ：別れの冷やし中華

　4月から一緒に住み始めたコロンビア人のルームメイトが、5月に入りインターンシップが終わってミラノから離れるということで、シェアハウスのメンバーで小さなホームパーティーのようなものを行い、冷やし中華をご馳走しました。

　彼は以前から私に「俺はラーメンが食べたいんだ！俺にラーメンを作ってくれ！」とよく言っていたのですが、何しろ私自身がラーメンを作ったことが無く、作れたとしても満足のいくクオリティで提供することは難しいこと、スープなどのダシを作るための材料の調達が難しいことからラーメンは選ばず、イタリアでも材料の調達が容易で調理過程も難しくなく、せっかくなら少しマイナーな日本の料理を体験してもらいたいことから冷やし中華を作ることにしました。

　冷麺は韓国や日本に根強い文化のようでヨーロッパではあまり定着していないらしく、彼らの口に合うか心配でしたが、皆から「美味しい」という感想とともにおかわりも頂くことができました。

　ルームメイトと日常、出会いと別れ、食文化の交流など、様々な国から来た人と一緒に暮らシェアハウスならではの日本に住んでいてはであまり出来ない濃い体験は、一生の思い出に残ると思います。

別れの余韻：と思いきや突然の新たなルームメイト

　コロンビア人のルームメイトが出て行ってから、シェアハウスの中には別れの余韻のようなものが漂っていたのですが、数日後、学校が終わり家に帰るとルームメイトの1人が「今日オーナーから電話がかかってきて、明日から新しいルームメイトが入居するらしい」という言葉を聞きました。あまりにも突然の出来事で驚きましたが、誰かが管理するシェアハウスに住んでいるということを考えれば普通のことです。

　新しく入ったはルームメイトはインド人で、ミラノの大学を卒業し今はエンジニアとして働いている人です。彼が到着して入居の手続きが終わりオーナーが帰った後、彼は「Oh, No!!」と叫んでいました。彼によると「写真と違ってめちゃくちゃ部屋狭いし、こんなに大勢で住んでるって聞いてないし、この金額だったらもっと良い家を探せるよ！」とのことでした。数年間ミラノに住んでいる彼だからこそわかることのようで、とりあえず7月まではこの家に住むことにするそうです。

　この家に住み始め約2ヶ月経ち気にしなくなったのですが、確かに写真詐欺ということは間違いありません。でも私がミラノにここに住むのは半年間だけなので「まあ良しとしよう」と思いました。

工業デザインって難しい：Product Development Design Studio

ミラノ工科大学で行なっているメインのプロジェクト、Product Development Design Studioは、3月のリサーチ、4月のコンセプト構築を経て、5月はデザイン検討の月でした。

5月の初めの授業で工業デザインに関するレクチャーがありました。内容は工業デザインのための素材や加工方法、それによるデザインの制限、図面の書き方などであり、最終提案でもこれらの内容を反映させなければならないとのことでした。

私たちのグループは「新しい形状の荷物入れと座席の配置」というコンセプトでデザインを進めているのですが、初めに学校にある椅子などを利用し実際の座席配置を想定したシミュレーションを行い、座席間の距離、搭乗者の頭上の空間がどれくらいまでなら快適かなど、飛行機内の空間の寸法の検討を行いました。

シミュレーションによる寸法の検討の後は、3Dモデリングソフトによる荷物入れの形状の検討を行いました。3Dで形状の検討行なったのは、荷物入れのデザインの際に飛行機内の寸法が大きく影響するため、しっかりと寸法を数値で把握しながらデザインを進める必要があったからです。

ある程度の空間の寸法を確認した後、実際の製造工程や素材、パーツ構成や組み立て方なども考慮しながら荷物入れのデザインを行う段階に移るのですが、この段階がかなり難航しました。

本来このプロジェクトではデザイナー2人とエンジニア2人でグループを組んで行うものなのですが、私たちのグループはプロジェクトの初期の段階でエンジニア担当の学生が1人脱退、もう1人のエンジニアだと名乗っていた学生が実はエンジニアの経験がそれほど無い上に私たちのグループが何をしているかをしっかりと理解できていない・説明しても理解できないという状況にありました。

私以外のもう1人のデザイナーの学生はインタラクションデザインというグラフィックやデジタルの分野の学生なので、プロダクトデザインの経験がある私が製造工程なども含めたデザインを担当することになりました。

しかし、私はプロダクトデザインの経験があるというものの、それはプロダクトのコンセプトや見た目・外見のデザインだけの経験で、素材、製造工程、ネジ一本一本を含めたプロダクトの構造など、真の意味での工業デザインをしたことがなかったため、その経験不足のツケがこのプロジェクトで回ってきたという感じでした。

5月の後半は毎週プロダクトの図面や3Dモデルを持っていき教授のフィードバックをもらうという流れだったのですが、１週間という時間制限や経験不足故の検討が足りない部分が多々あり、フィードバックが終わってから全てを一から作り直すということが日常茶飯事でした。

積み上げたものが全て崩れてしまい一からやり直す事を何度も繰り返すというのは精神的にもかなり苦しかったのですが、メンタルはかなり鍛えられたと思いますし、このようなやり直しを何度も繰り返して良いものが出来ていくのだと思います。製造工程も考慮した実現可能なデザインというのは私が留学で学びたかったことの１つでもあるので、良い経験になったと思います。

このプロジェクトも終盤で、最終発表は6月中旬になります。

蚊が多い：イタリアでも蚊取り線香

　5月に入ってイタリアはだいぶ暑くなりました。誰かに会うと必ず気温の話をするほどには暑いです。時には気温が40度まで行くこともあります。日も長く、夜の９時まではだいぶ明るく、その後急に暗くなるので、少し感覚がおかしくなりそうになります。

　暑いのも辛いですが、この季節になるともう１つの悩みが増えました。蚊です。夜になると数匹の蚊が家の中を飛び回り、夜中に虫刺されが痒くて目が覚めてしまうということも多々あります。

　蚊の対策を何かできないかと調べていたところ、イタリアにも蚊取り線香が売っているということがわかりました。蚊取り線香は日本の夏の風物詩というイメージがあったので、イタリアでも普通に売っていることに驚きました。

　日本でいうベープのような電気で動くものも売っていたのですが、趣があるなと思いあえて火を付ける渦巻きのタイプのものを選びました。イタリア語ではSpirali antizanzare、直訳すると「蚊に対抗する渦巻き」といった感じです。

　蚊取り線香を使うことで夜中の虫刺されがだいぶ少なくなりました。おばあちゃんの家のような懐かしい匂いがして良い感じです。

さらば友よ再び：ブラジル流ストロガノフ

　5月末になり、他のメンバーよりも授業期間が早く終わったフランス人のルームメイトがシェアハウスを出ていくことになりました。今回はブラジル人のルームメイトがストロガノフという料理を作ってくれて、出発前夜に皆で一緒に食べました。

　ストロガノフという料理はもともとロシアの料理ですが、移民の影響などでブラジルにも伝わっており、南米流の独自の進化を遂げていったようです。

　今回作ってくれたのは、鶏肉の入ったトマトと牛乳ベースのソースと細かく砕いたポテトチップスをご飯にかけるというものでした。彼によるとブラジルではストロガノフ用の小さいサイズのポテトチップス（日本でいうカラムーチョのような形状）がお店で売っているらしいです。日本やヨーロッパの料理、留学中の自炊で作っている料理とも味付けや趣向が違うので、面白かったです。

　フランス人のルームメイトは翌朝、皆がいつも目が覚めるより少し早い時間に出発していきました。留学も終盤に差し掛かり、色々な人たちとの別れの季節が少しずつ迫っている事を実感した日でした。